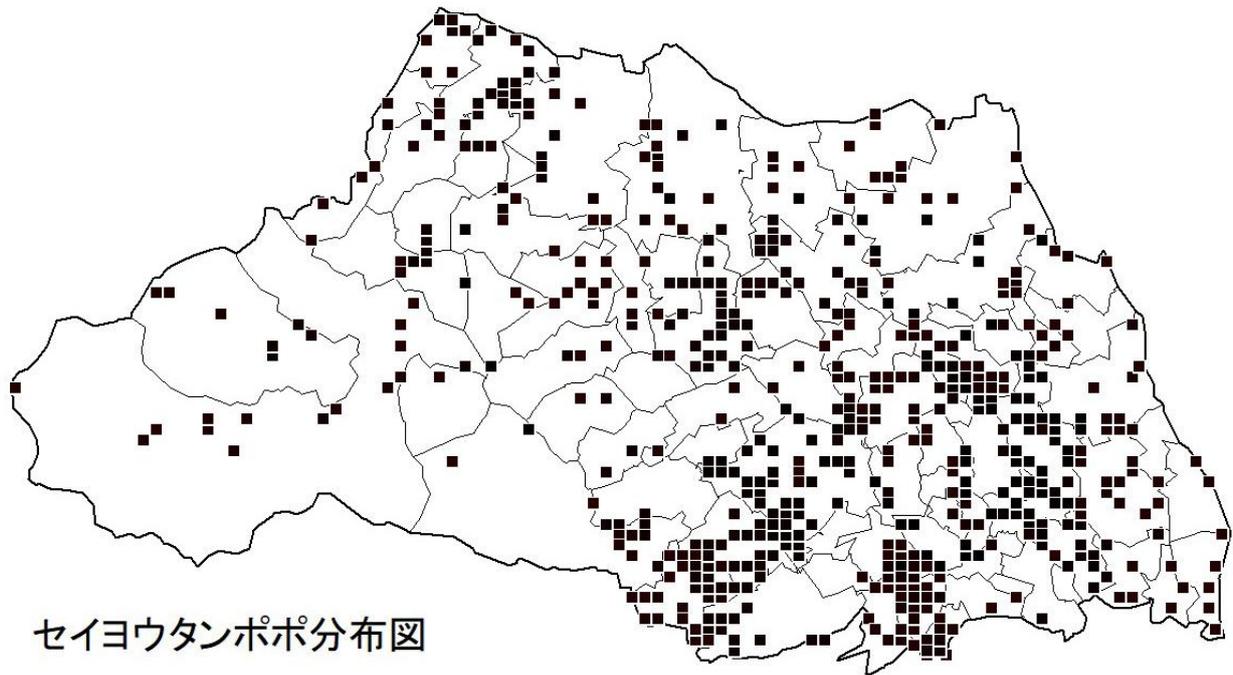
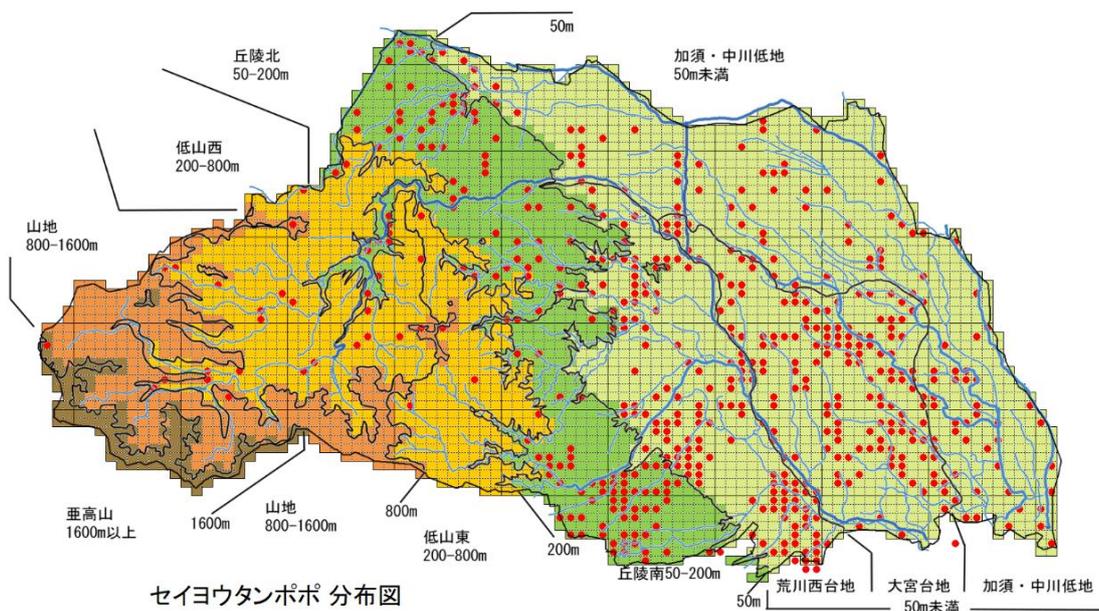


14 セイヨウタンポポ(キク科) *Taraxacum officinale* 重点対策外来種



セイヨウタンポポ分布図



セイヨウタンポポ 分布図

分布情報

3年間の調査では県内全域で分布が確認できた。埼玉県全54区画中44区画からの報告があった。

埼玉県植物誌1998によれば県内全域にくまなく分布

する。亜高山帯も例外ではない。県レッドデータブック2011の調査でもほぼ同じ分布を確認している。

セイヨウタンポポ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	103	11.5
河川敷	B	208	23.2
水田・休耕田・畑	C	272	30.3
市街地	D	314	35.0
合計		897	100

環境別報告件数 897件の報告があった。報告件数が多い外来種の一つである。生育地は市街地が多く報告の35%を占める。次いで水田・休耕田・畑30.3%、河川敷23.2%となる。雑木林以外の環境では、その数値は拮抗しており、環境を選ばない種といえる。

種の概要 草丈は通年を通して 5-30 cmで、春夏秋冬あまり変わりはない。土壌によっては相当高く

セイウタンポポ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1				1			1	
2							0	
3			1	2			3	
4	1	2	9	37	10		59	
5	1	15	40	206	141		403	
6	3	28	49	157	120	9	366	
7	5	24	13	61	34	5	142	
8	1	15	4	22	10		52	
9	2	22	11	37	23		95	
10	11	73	24	88	46		242	
11	15	23	11	39	17	1	106	
12	4	13	2	9	3		31	
合計	43	215	164	659	404	15	1500	

なることもある。本種は総苞外片が反り返るのを大きな特徴とする。在来種カントウタンポポの総苞外片は反り返らない。両者の交雑種をアイノコセイウタンポポというが、この総苞外片は開出するが反り返らない。

本種は生物多様性保全上重要な地域に侵入・定着し被害をもたらす可能性が高いとされるが、本県では全域分布の状態が長期間続いており被害の実態は不明のままである。

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

生活段階の月変化 季節に関係なく 1 年を通していつでもすべての生活段階が観察できる。その中でも 5-6 月は、開花・結実が多く見られる。

群落の大きさ・広がり 大きさは10-99株が一般的である。群落面積では100㎡未満が一般的である。

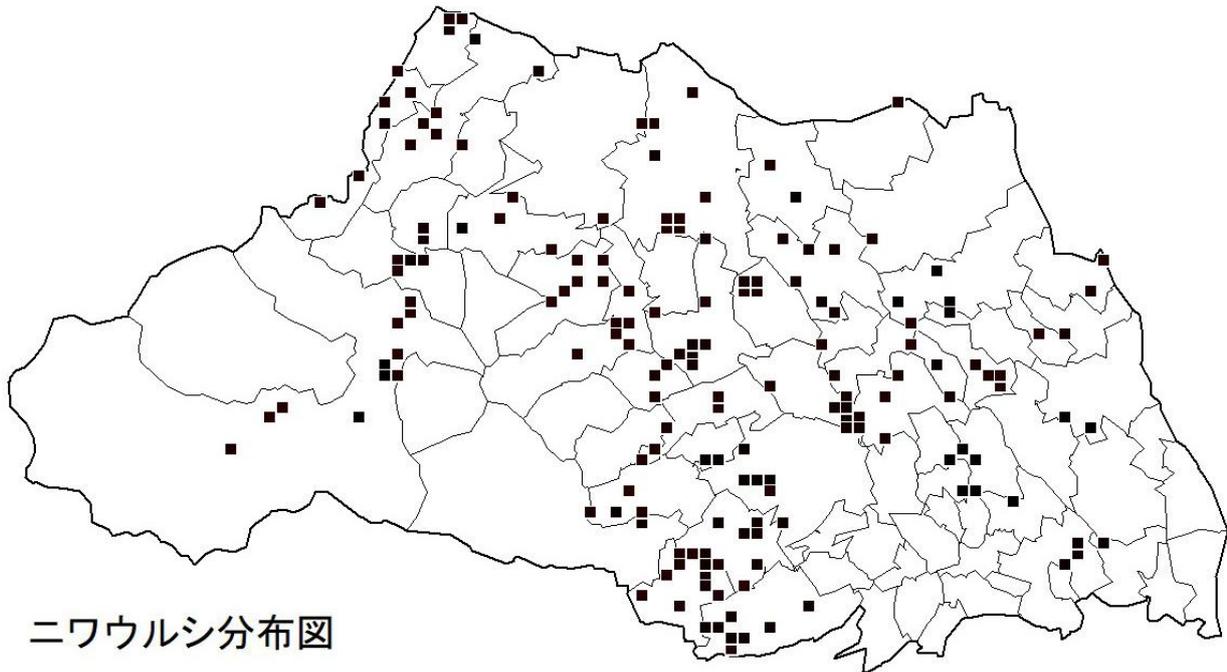
セイウタンポポ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
	a-fは株 g-lは㎡	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05㎡未満	0.25㎡未満	1㎡未満	10㎡未満	100㎡未満	
1			1										1
2													0
3			1	1									2
4	12	8	10	8									38
5	28	36	102	40	8				3	4	8	3	232
6	27	42	104	20	1	9			1		6		210
7	9	16	38	12	1	1			5	1			83
8	3	11	15	3	1				1				34
9	13	15	33						1		1	1	64
10	21	21	68	17	2	1			1	2	8		141
11	16	19	23	6	2								66
12	4	7	12	2					1				26
合計	133	175	407	109	15	11	0	1	12	7	23	4	897

当該種の消長 明治の初め北海道に導入された。

カントウタンポポは減少傾向にあるが、この現象はセイウタンポポの分布が拡大したことと連動しているのかどうかは即断できない。ただし最近、カントウタンポポとセイウタンポポの交雑種が増え、セイウタンポポを凌駕している可能性がある。その結果セイウタンポポが減少しているのではないかと懸念されるが、それを立証するデータがない。外来性のタンポポについてはさらにデータを集め精査する必要がある。



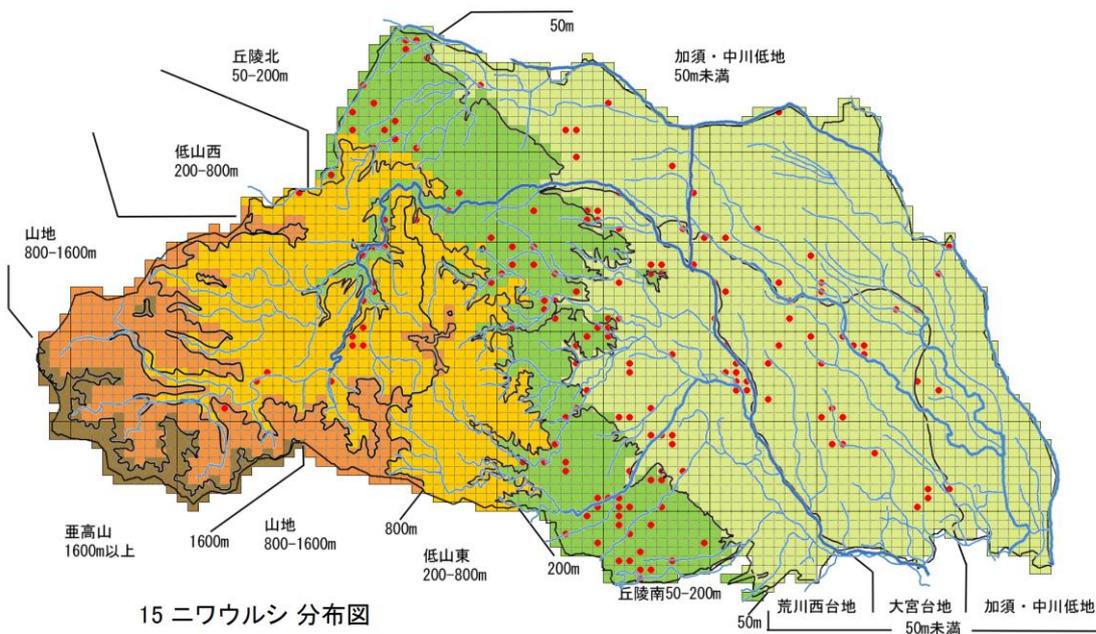
15 ニワウルシ(ニガキ科) *Ailanthus altima* 重点対策外来種



ニワウルシ分布図

分布情報

3年間の調査では、亜高山、山地帯以外の地域で分布が確認されているが、県南部の都県境沿いはごくわずかの報告しかなくほぼ県内全域に分布している。県レッドデータブック



15 ニワウルシ 分布図

2011の調査でもほぼ県内全域に分布している。今回の調査では埼玉県全54区画中31区画からの報告があった。

ニワウルシ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	41	18.0
河川敷	B	61	26.8
水田・休耕田・畑	C	58	25.4
市街地	D	68	29.8
合計		228	100

環境別報告件数 報告件数は228件であった。生育地は市街地29.8%、河川敷26.8%、水田・休耕田・畑25.4%、雑木林18%と同じような割合で分布している。全般的には環境を選ばないで生育する樹木であるといえる。

種の概要 高さ 10～20m。葉はウルシに似た大形の奇数羽状複葉で互生する。小葉は 6～12 対あり、

ニワウルシ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4							0	
5		8	34	16	7	3	68	
6		2	54	1	4	2	63	
7		3	23	1	3	2	32	
8			4		1	1	6	
9			21	2	2	2	27	
10		7	32			8	47	
11		3	10			1	15	
12			3				3	
合計		23	181	20	17	19	261	

長卵形～披針形で先が細くとがり、基部にある鋸歯の縁には腺点がある。6月頃枝先に緑白色の小花を多数つける。果実は翼果。中央に扁平な種があり褐色に熟す。風によって散布される。本種の名はウルシの葉に似ていることに由来するもので、かぶれるものではない。別名シンジュともいう。

生活段階の月変化 5-7月までの間、幼植物から結実まですべての生活段階が観察できる。

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

る。

群落の大きさ・広がり 10-99 株が一般的であるが、それより一段少ない場合と多い場合が普通に見られる。

ニワウルシ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1													0
2													0
3													0
4													0
5	11	13	25	5	1				1			3	59
6	11	14	28	4	2						1		60
7	3	5	12	3									23
8	1	1	2	1									5
9	7	5	9	3									24
10	11	13	6	3	2							5	40
11	5	5	3		1								14
12	1		2										3
合計	50	56	87	19	6	0	0	0	1	0	1	8	228

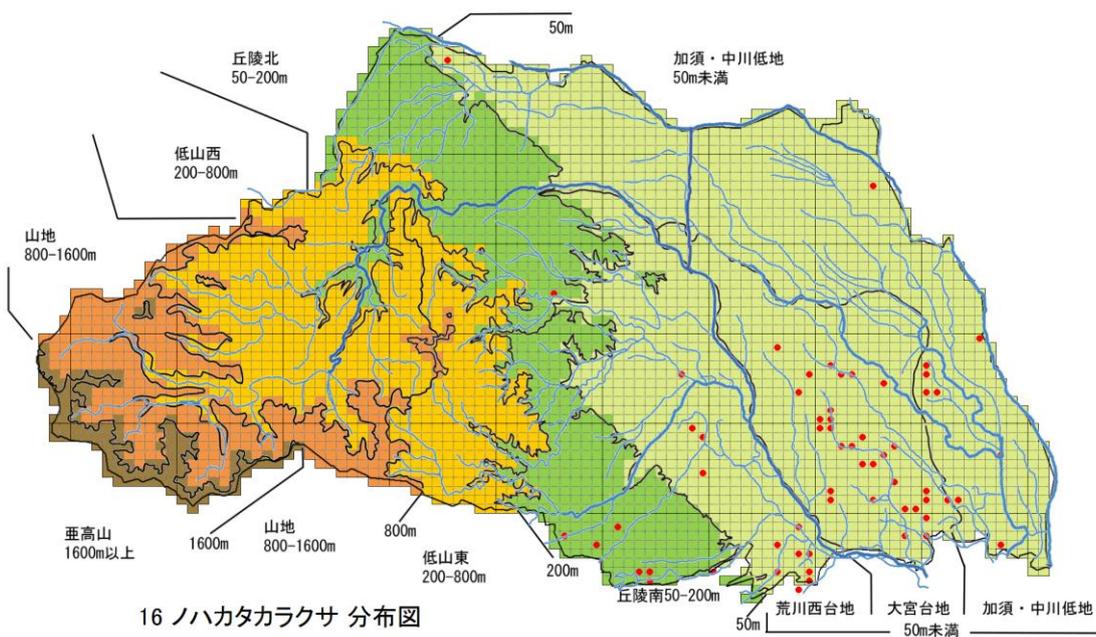
当該種の消長 明治10年ころ渡来し、庭木、街路樹として栽培された。本県では第二次世界大戦中、野蚕(シンジュサンの幼虫)のえさとして県内に広まった。河川敷、空き地などにパイオニア樹種として侵入する。種子の発芽率も良い。また、萌芽更新率も高く、成長も速いため分布を広げているようだ。県内全域分布ではあるが、県内隅々までさらに拡大を続けているのではないかとと思われる



16 ノハカタカラクサ(ツユクサ科) *Tradescantia flumiensis* 重点対策外来種



ノハカタカラクサ分布図



16 ノハカタカラクサ 分布図

分布情報

3年間の調査では加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南の報告があった。河川に沿って群落が成立している傾向がある。埼玉県全54区画の中15区画の報告があった。

埼玉県植物誌 1998 によれば、熊谷・北本・緑区の3地点ほどの記録がある。県レッドデータブック 2011 の調査では、今回の調査とほぼ重なり県南部・県東部の分布が確認されている。

ノハカタカラクサ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	14	17.1
河川敷	B	16	19.5
水田・休耕田・畑	C	7	8.5
市街地	D	45	54.9
合計		82	100

環境別報告件数 報告件数は 82 件であった。生育地は市街地が最も多く、報告の 54.9% を占める。河川敷、雑木林が続き、水田・休耕田・畑の順である。もともと園芸品種が逸出して野生化したものなので、市街地に多く見られるのは納得できる。全体としてみれば環境を選ばない種といえる。

種の概要 茎は良く分岐して地を這い、節から不定根を出して広がり、長さ1m以上になる。葉は先が尖った卵形で基部は葉鞘となる。夏、茎の頂に直径1cm程の白い3弁の花を数個ずつつける。3枚の花弁は同形同大である。別名トキワツユクサという。

ノハタカラクサ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4		1					1	
5		7	8	17	1		33	
6		7	8	20	4		39	
7		8	3	7	1		19	
8							0	
9			1	1	2		4	
10		9		1			10	
11		5					5	
12		5					5	
合計	0	42	20	46	8	0	116	

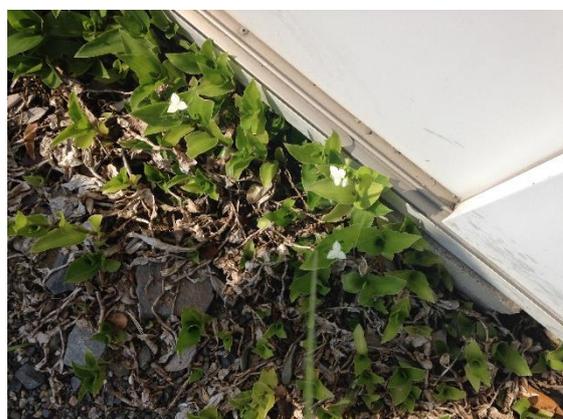
生活段階の月変化 栄養繁殖のためか幼植物の報告がない。つぼみ・開花・結実は5-7月に見られる。

群落の大きさ・広がり 大きさは10-99株が一般的である。群落面積は100㎡未満である。

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

ノハタカラクサ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株 g-lは㎡	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05㎡未満	0.25㎡未満	1㎡未満	10㎡未満	100㎡未満	100㎡以上	
1													0
2													0
3													0
4			1										1
5		4	7	7						2			20
6	2	2	12	5				1	1		1		24
7	1	2	5	1	2				1	1			13
8													0
9		2	1	1									4
10	1	1	7	1									10
11				2				2		1			5
12	1		1	2		1							5
合計	5	11	34	19	2	1	0	3	2	4	1	0	82

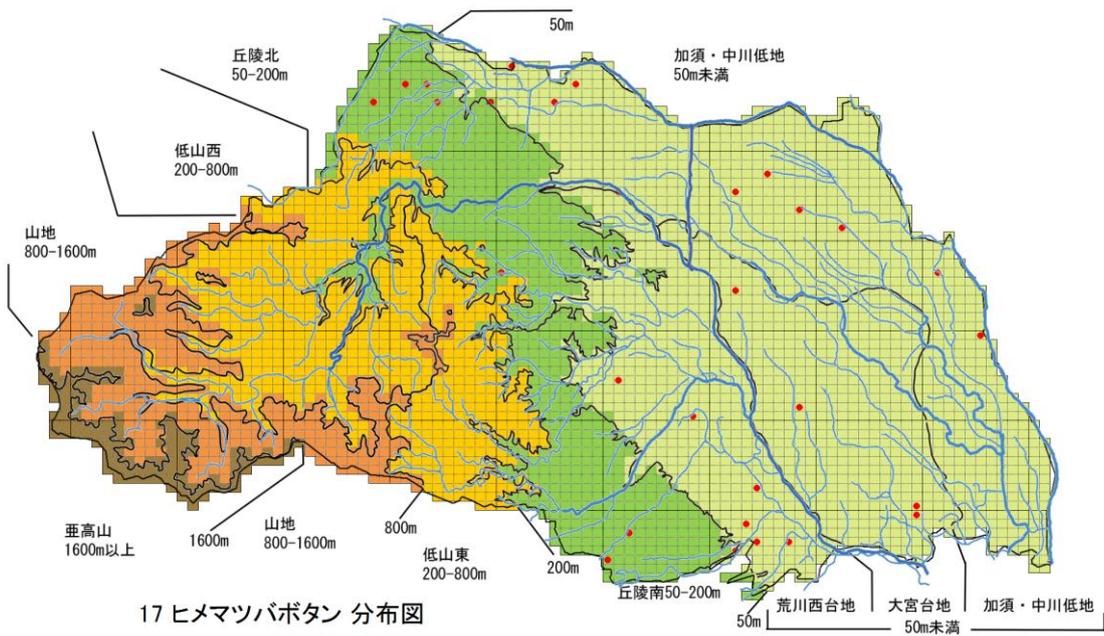
当該種の消長 昭和年間の初期に葉に白斑の入った園芸品種が観賞用に導入され温暖地で逸出した。本県では埼玉県植物誌1998ではわずかな記録しかなく、その後、県レッドデータブック2011の調査で県南部・県東部に広がりを見せていることが確認された。県北部や県西部はどうなのか、実際のところははっきりしない。引き続き調査を続行してデータを取得し、その実態を把握する必要がある。



17 ヒメマツバボタン(スベリヒユ科) *Portulaca pilosa* 重点対策外来種



ヒメマツバボタン分布図



17 ヒメマツバボタン 分布図

分布情報

3年間の調査では加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北の報告があった。埼玉県全54区画中17区画から報告があった。埼玉県植物誌1998によれば、

秩父地域・県北部・県南部を中心に分布が記録されている。県レッドデータブック2011の調査では埼玉県植物誌1998とほぼ重なる分布が確認された。

ヒメマツバボタン			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	1	3.2
河川敷	B	5	16.1
水田・休耕田・畑	C	3	9.7
市街地	D	22	71.0
合計		31	100

環境別報告件数 31件の報告があった。生育地は市街地が71%とほとんどを占める。次いで河川敷、水田・休耕田・畑となる。雑木林はわずかであった。乾燥した日当たりの良い場所を好む植物であることがわかる。

種の概要 全体多肉質。茎は基部からよく分岐して地を這い、または斜上して長さ 30 cm程になる。葉

ヒメマツバボタン		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4							0	
5					3	1	4	
6		4	1	1			6	
7		2	3	3	1		9	
8		4		3			7	
9		2	2	6	1		11	
10				3	3		6	
11							0	
12					1		1	
合計	0	12	6	19	7	0	44	

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

生活段階の月変化 5-10 月の

半年間で、成葉からつぼみ・開花・結実のすべての生活段階が観察できる。

群落の大きさ・広がり 大きさは 10-99 株が一般的である。群落面積の報告では 10 m²未満である。

ヒメマツバボタン		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1													0
2													0
3													0
4													0
5		1	1	1									3
6	2	1	1										4
7		1	3										4
8	1	1	2	1					1	1			7
9	3	2	2										7
10		1	4										5
11													0
12	1												1
合計	7	7	13	2	0	0	0	0	1	1	0	0	31

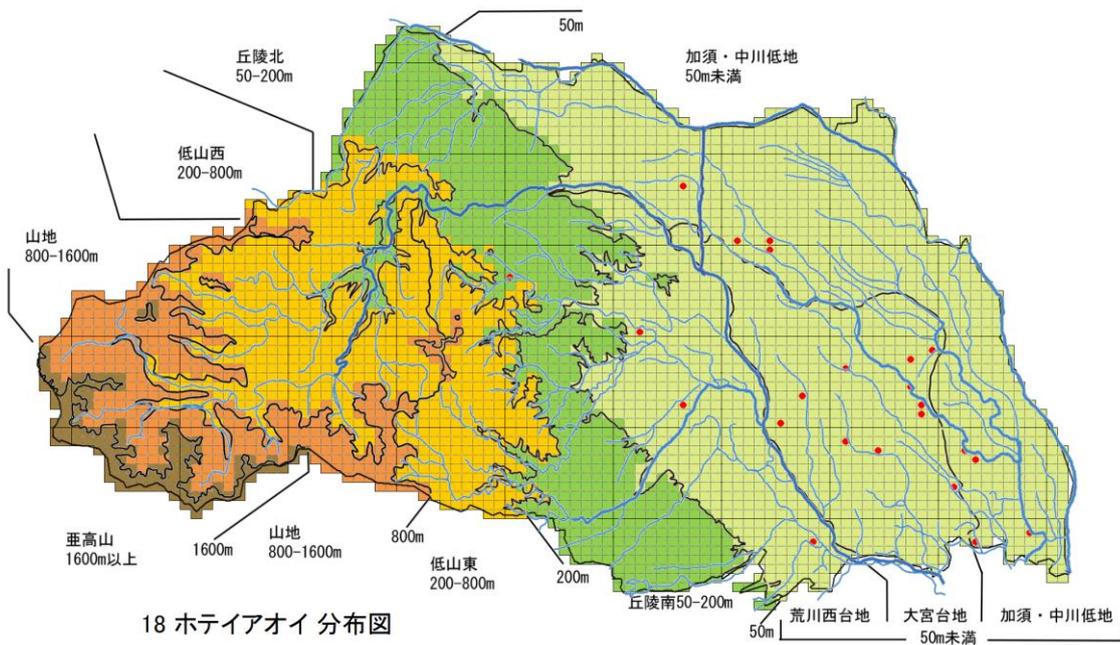
当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、1960 年代に帰化が知られるようになり、現在では関東地方以西で乾燥した日当たりのよい道端などに発生する。本種は熱帯アメリカ原産であり、その多肉質で棒状の細長い葉をもつという形態を見ても、葉からの蒸散を極力抑えた構造になっており、高温や乾燥に強いことは想像できる。本県の場合、過去のデータを含めても確認数はわずかであり、出現も不安定のところが感じられ、定着していないと考えられる。



18 ホテイアオイ(ミズアオイ科) *Eichhornia crassipes* 重点対策外来種



ホテイアオイ分布図



18 ホテイアオイ 分布図

分布情報

3年間の調査では、加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵北の報告があった。河川に沿って群落が成立している。埼玉県全54区画中12区画から報

告があった。埼玉県植物誌 1998 によれば、本庄・行田・羽生・加須・久喜・杉戸・坂戸での記録がある。県レッドデータブック 2011 の調査によれば、行田・羽生・川越・上尾・岩槻・越谷で確認されている。

ホテイアオイ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	2	7.1
河川敷	B	19	67.9
水田・休耕田・畑	C	3	10.7
市街地	D	4	14.3
合計		28	100

環境別報告件数 報告件数は 28 件であった。河川敷での優占度は 67.9%と高く池沼を伴う河川敷に多い。次いで市街地、水田・休耕田・畑となる。本種は水辺環境を必要とし、水辺があればどこでも生育する。

種の概要 多年生の浮遊植物。茎は水中にあり葉を叢生する。葉は長さ 5~15 cmの広い倒卵形で、厚

ホテイアオイ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4							0	
5		1	2				3	
6			1				1	
7			3	2	1		6	
8			1	1	2		4	
9			2		2		4	
10			8	2	2		12	
11			3				3	
12							0	
合計	1	20	5	7	0	0	33	

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

は10-99株が一般的でそれより一段少ない場合と多い場合が普通に見られる。群落面積は広くても100 m²未満である。

生活段階の月変化 つぼみ・開花は7-10月まで見られる。

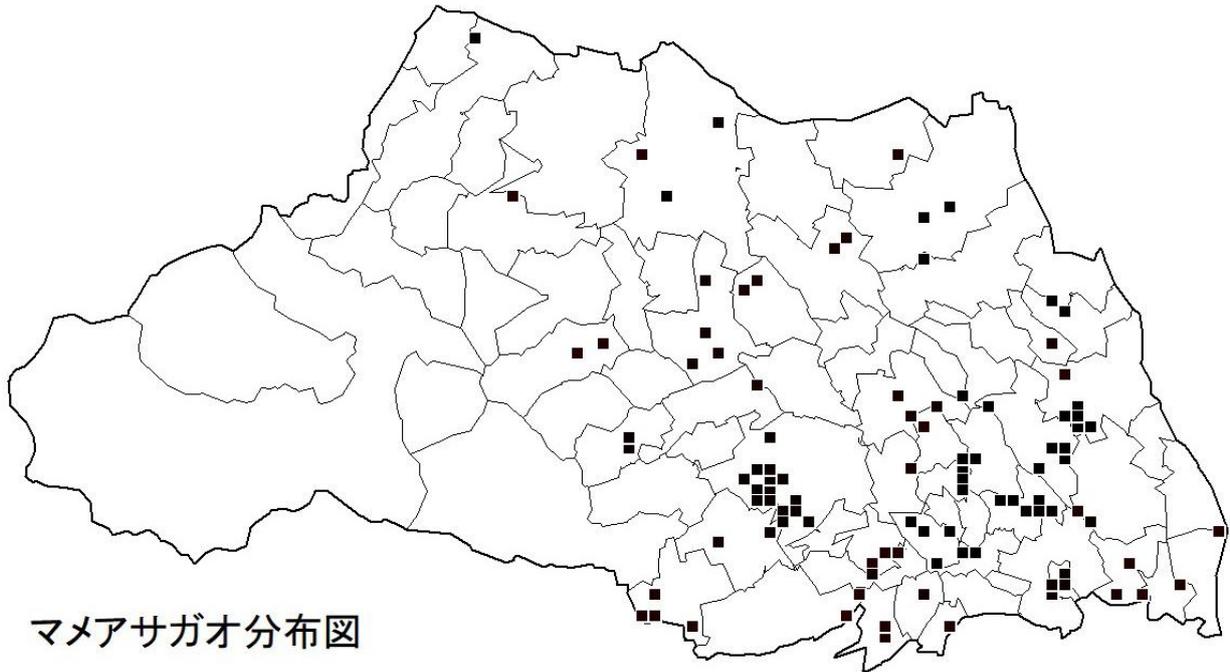
群落の大きさ・広がり 大きさは

ホテイアオイ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1													0
2													0
3													0
4													0
5			2	1									3
6			1										1
7		2		2	1								5
8	1					1					1		3
9			2		1					1			4
10			4	2	1					1	1		9
11		1								1	1		3
12													0
合計	1	3	9	5	3	1	0	0	0	3	3	0	28

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、明治中期に観賞用に渡来し、今は南関東、北陸以西にみられ、観賞用として栽培もされるが、暖地では水路の害草として嫌われる。異常繁殖が問題になったのは1960年以降。本県では低地の池沼に分布が確認されているが、多く分布しているというほどではない。十分な調査データはないが、水質浄化の作用もあり、緑肥として利用している地域もあるので、現在も拡大を続けているものと考えられる。



19 マメアサガオ(ヒルガオ科) *Ipomoea lacunosa* 重点対策外来種

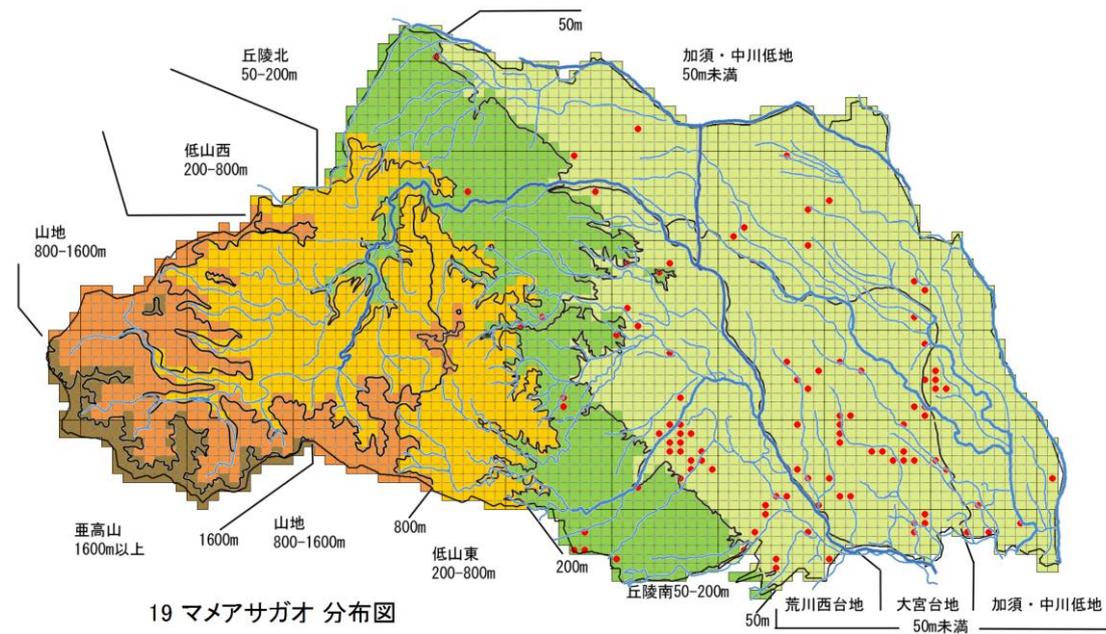


マメアサガオ分布図

分布情報

3年間の調査では、加須・中川低、大宮台地、荒川西台地・丘陵南で確認された。県東部に多く見られる。

埼玉県植物誌1998によれば、亜高山、山地帯以外のほぼ県内全



19 マメアサガオ 分布図

域に分布している。県レッドデータブック 2011 の調査においてもほぼ県全域での確認がある。今回の調査では埼玉県全 54 区画中 25 区画で報告があった。

マメアサガオ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	6	4.8
河川敷	B	52	41.3
水田・休耕田・畑	C	39	31.0
市街地	D	29	23.0
合計		126	100.1

環境別報告件数 126 件の報告があった。生育地は河川敷での確認が多く 41.3%、次いで水田・休耕田・畑が 31%、市街地 23%、雑木林 4.8%の順であった。

種の概要 茎はつる性で他物に巻きつき長さ数mになる。葉は先の尖った長卵形から心臓形で全縁ま

マメアサガオ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4							0	
5				1		1	2	
6		5	1	2			8	
7		6	1	3			10	
8		1	2	3			6	
9		1	13	53	14	1	82	
10	1	1	9	37	25	3	76	
11		2			5	4	11	
12							0	
合計	1	16	26	99	44	9	195	

たは3裂し、長い葉柄があつて互生する。夏から秋、葉腋に1~2本の花茎を出し、直径1.5cm程の淡紫色から白色のロート形の花を1~2個つける。花柄にはイボ状の突起が密生し、稜がある。本種に似たホシアサガオは花が数個まとまってつき、花柄のいぼ状突起はまばらである。絶滅危惧種等との競合が懸念されているというが、本県の場合そのような報告は聞かない。

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

生活段階の月変化 つぼみ・開花は6-10月までの長い期間観察できる。

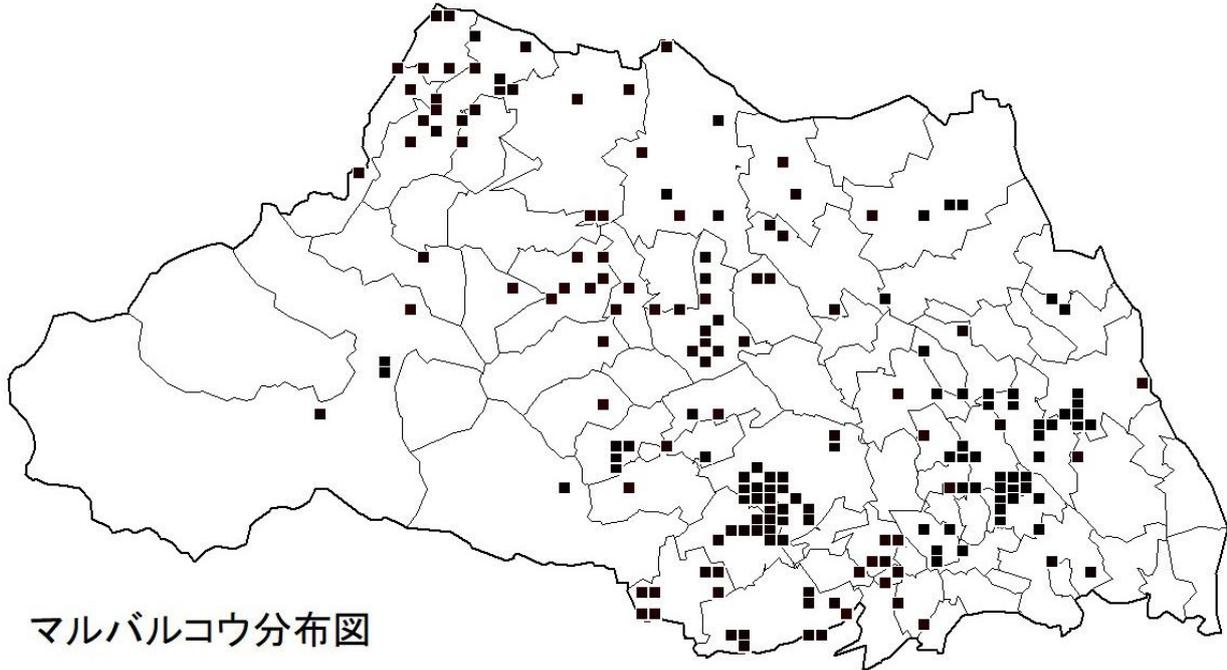
群落の大きさ・広がり 大きさは10-99株が一般的でそれより一段少ない場合と多い場合が普通に見られる。

マメアサガオ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1													0
2													0
3													0
4													0
5			1							1			2
6		2	2	2	2								8
7			3	1	1					1	1	1	8
8			1	2	1								4
9	1	13	19	8	3				1	9	1		55
10	4	12	15	3	1			1	2	5	1		44
11	1	1	1	2									5
12													0
合計	6	29	43	16	8	0	0	1	3	16	3	1	126

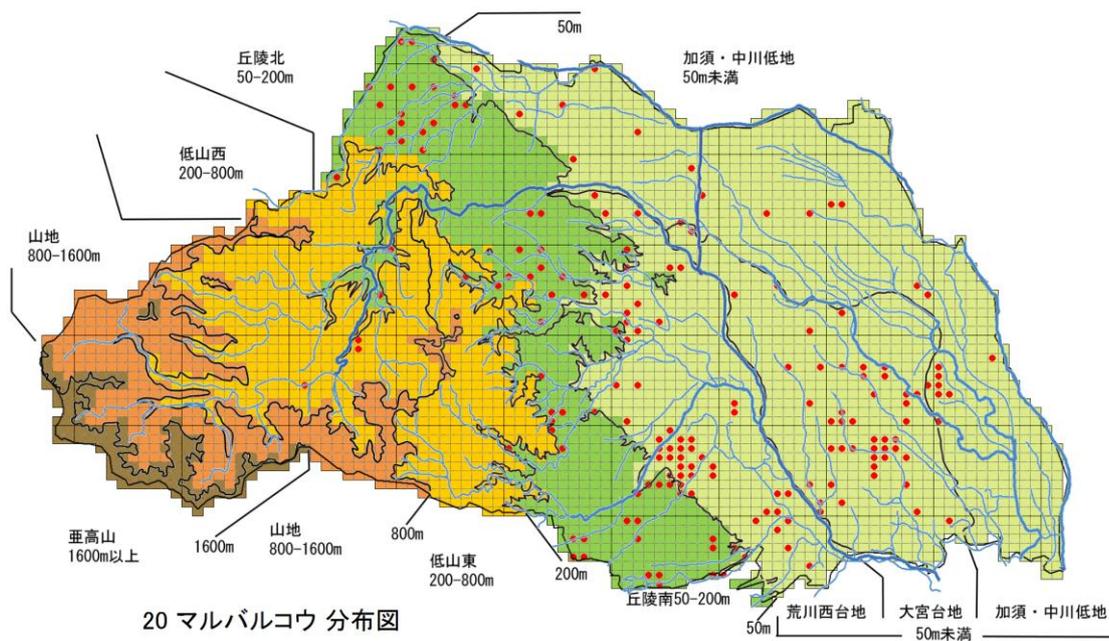
当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、1955年に東京近郊での帰化が報告され、現在では東北地方以南で、道端などにやや普通に見られるとある。今回、報告件数自体は少ないが、近年水田・休耕地・畑や道端で、目にする機会が増えている。しかし、分布が拡大している兆候は感じられない。



20 マルバルコウ(ヒルガオ科) *Ipomoea coccinea* 重点対策外来種



マルバルコウ分布図



20 マルバルコウ 分布図

分布情報

3年間の調査では山地帯、亜高山帯を除きほぼ県内全域で分布が確認できた。埼玉県全54区画中30区画から報告があった。埼玉県植物誌

1998によれば、秩父線沿いと県西部に記録がある。県レッドデータブック 2011 の調査では亜高山帯・山地帯を除きほぼ県内全域で確認され、今回の調査と分布が重なっている。

マルバルコウ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	11	4.8
河川敷	B	47	20.6
水田・休耕田・畑	C	105	46.1
市街地	D	65	28.5
合計		228	100

環境別報告件数 228 件の報告があった。生育地は水田・休耕田・畑が圧倒的に多く報告の46.1%を占める。次いで市街地 28.5%、河川敷 20.6%、雑木林の順になる。雑木林での確

認は少ない。

種の概要 つる性 1 年草で他物に絡みつき数mも這い登る。葉はハート形で互生する。春から夏にか

マルバルコウ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4							0	
5			3		1		4	
6		2	11	7	10	1	32	
7			7	1	5		13	
8		1	11	3	15	1	31	
9				14	75	15	104	
10		1	5	17	62	24	110	
11		1	1	3	15	9	33	
12				1	1	4	9	
合計		5	38	46	184	54	336	

け、朱紅色で五角形ロート状の小さな花が咲く。まぎらわしい種はないが葉だけのときは迷う。葉はいわゆるサツマイモの葉と同じ形となり、全体卵形で基部は心形となる。葉には長い葉柄がある。近縁種では栽培品のルコウソウがある。絶滅危惧種等との競合の事例は聞いていない。

生活段階の月変化 6-11月までの半年間にいつでもどの生活段階も観察できる。繁殖期間が長い植物である。

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

群落の大きさ・広がり 大きさは 10-99 株が一般的である。群落面積は 10 m²未満が一般的でそれより一段多い 100 m²未満も普通に見られる。

マルバルコウ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計	
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l		
	a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満		100m ² 以上
1														0
2														0
3														0
4														0
5		1	2						1					4
6		5	3	11						1	1			21
7			3	5	1					2				11
8		3	3	8	2			1		5	2	1		25
9		9	22	26	6	2			1	4	4	1		75
10		4	9	28	6	1		1	4	6	7	1		67
11		4	3	9	2			1			1	1		21
12			2		2									4
合計		26	47	87	19	3	0	0	4	5	18	15	4	228

当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、1850 年前後に花卉として渡来したが、暖地を中心に野生化した。現在では北陸、北関東以南に分布している。本県ではほぼ全域に分布していると考えられるが、今回の調査結果では全域分布の様子はうかがえない。根拠となる調査データが不足しているが、道端や畑地で目にする機会は増えている。



21 メリケンガヤツリ(カヤツリグサ科) *Cyperus eragrostis* 重点対策外来種

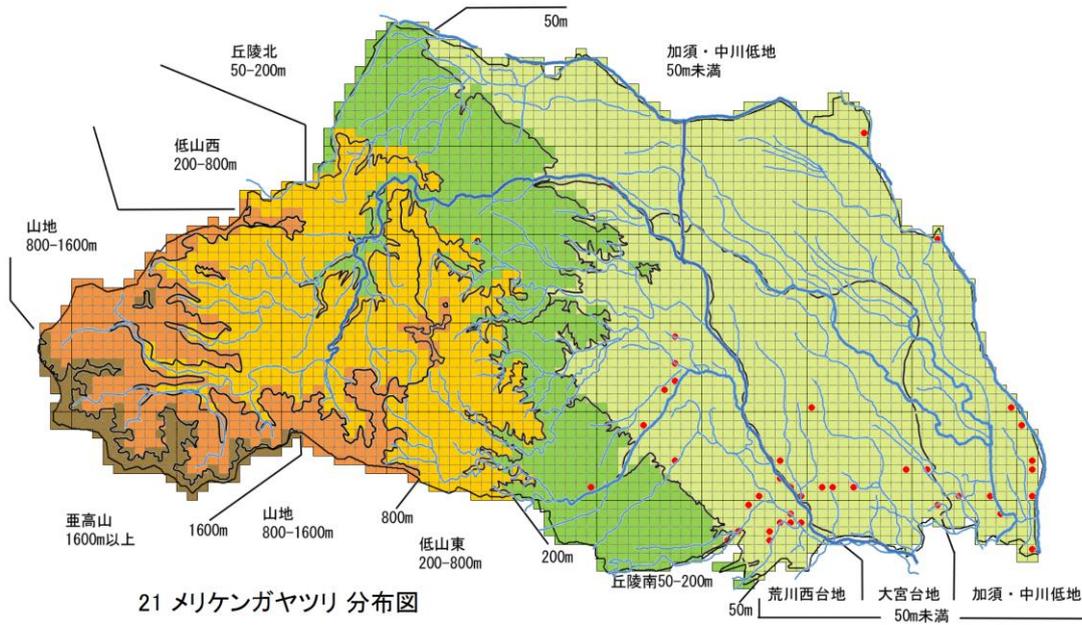


メリケンガヤツリ分布図

分布情報

3年間の調査では、加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南の、いずれも県南部で確認の報告があった。河川に沿って群落が成立している。

埼玉県植
物誌 1998



21 メリケンガヤツリ 分布図

に、この種の掲載はない。県レッドデータブック 2011 の調査では羽生・菖蒲・松伏・上尾・坂戸・狭山・飯能・所沢で確認されている。今回の調査では埼玉県全 54 区画中 15 区画で確認された。

メリケンガヤツリ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	0	0.0
河川敷	B	43	78.2
水田・休耕田・畑	C	7	12.7
市街地	D	5	9.1
合計		55	100

環境別報告件数 55 件の報告があった。生育地は河川敷が多く、報告の 78.2%を占める。次いで水田・休耕田・畑、市街地の順となる。雑木林の報告は無かった。

種の概要 茎は束生し3稜形で太くて丈夫。高さ30~100 cm。葉は茎とほぼ同長、幅4~8 mm、縁はざ

らつき、基部は鞘となり茎を包む。茎の基部につく2~3個の葉は葉身を欠き紫色を帯びる。総苞片は茎の先に4~7個がつき、葉状で花序より著しく長いものもある。花序の枝は数個~10個以上で1~10 cm、頂部に多数の小穂が球形に密生する。小穂は線形、扁平で淡黄緑色、20花ほどを2列につける。鱗片は広卵形。果実はそう果、倒卵形で3稜あり、長さ1 mmでほぼ平滑。

メリケンガヤツリ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4							0	
5		1	1	3			5	
6			2	6	8		16	
7			2	6	10		18	
8		1	1	3	4		9	
9				4	8		12	
10				4	1	1	6	
11				2	5	2	9	
12					2	1	3	
合計	0	2	6	28	38	4	78	

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

生活段階の月変化 つぼみは5月から見られ、開花・結実は6月-11月の半年の長きにわたり観察することができる。

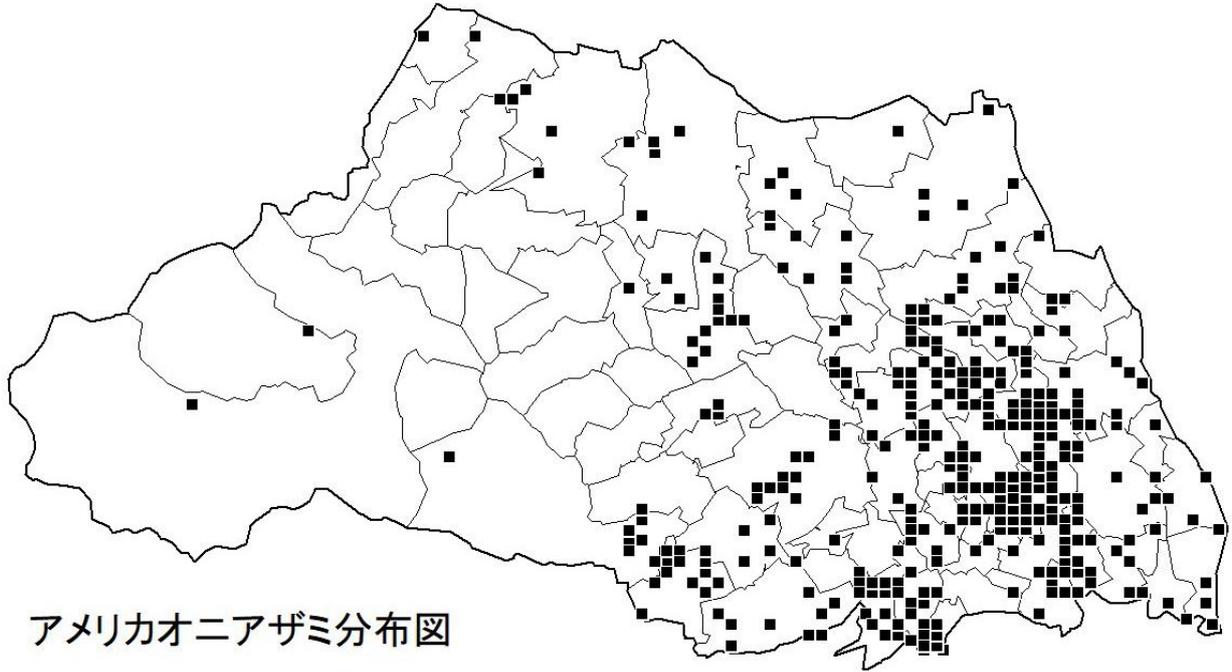
群落の大きさ・広がり 大きさは10-99株が一般的であるがそれより一段少ない場合と多い場合が普通に見られる。群落面積の報告では10 m²未満が一般的である。

メリケンガヤツリ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1													0
2													0
3													0
4													0
5	2		1	1						1			5
6		1	4	5									10
7		4	3	3						1	1		12
8			4	1									5
9		2	5	2									9
10		3	1	1									5
11	3	3	1										7
12			2										2
合計	5	13	21	13	0	0	0	0	0	2	1	0	55

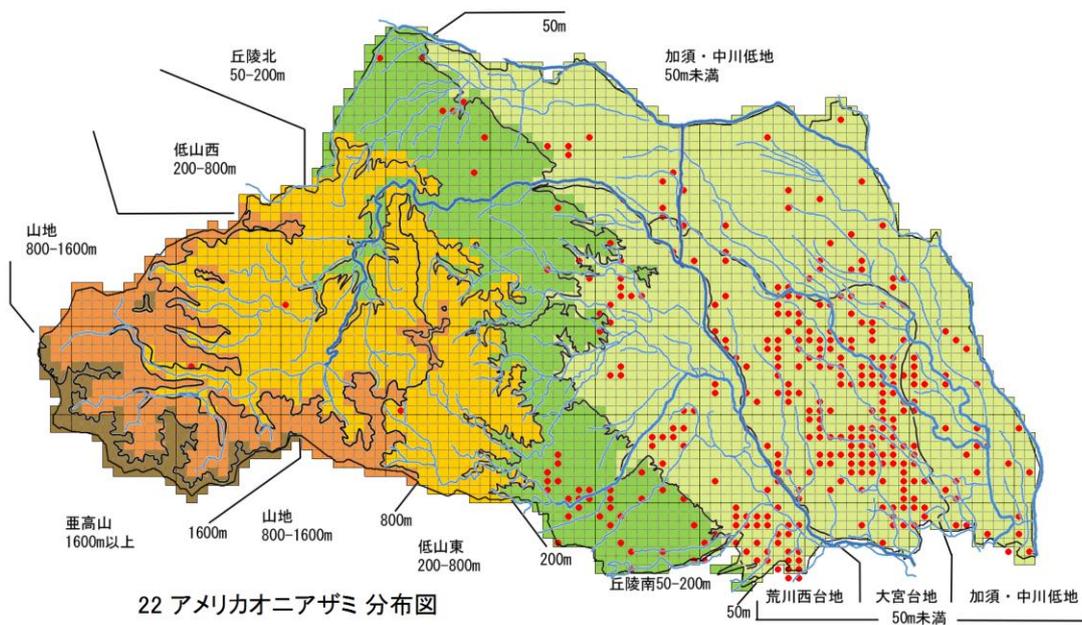
当該種の消長 日本帰化植物写真図鑑によれば、1950年代の渡来といわれる。侵入生物データベースでは1959年の三重県、神奈川で1980年代に確認、1990年代後半に分布拡大とある。十分な調査データはないが、現在もとどまることなく拡大を続けているものと考えられる。本県では1998年代ではほとんど確認されなかった。その後、県レッドデータブック2011では県南部・県西部に広がりを見せた。



22 アメリカオニアザミ(キク科) *Cirsium vulgare* その他の総合対策外来種



アメリカオニアザミ分布図



22 アメリカオニアザミ 分布図

分布状況

3年間の調査では、加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北秩父で確認されている。

埼玉県植物誌1998によれば、行田、春日部、越谷、

浦和、草加、八潮、三郷で確認されている。県レッドデータブック2011の調査においても、加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南に分布となっているが、秩父でも確認されている。埼玉県全54区画中34区画で確認されている。

アメリカオニアザミ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	32	7.3
河川敷	B	63	14.4
水田・休耕田・畑	C	111	25.3
市街地	D	232	53.0
合計		438	100

環境別報告件数 438件の報告があった。生育地は市街地が圧倒的に多く全体の53%を占め、水田・休耕田・畑が25.3%、河川敷、雑木林の順となる。

種の概要 別名セイヨウオニアザミ。茎には鋭い棘のある翼がある。花は赤紫色で枝先に2,3個付く。

アメリカオニアザミ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4	1	3		1			5	
5	3	50	21	12	4		90	
6	11	64	65	58	19	4	221	
7	1	15	32	66	28	2	144	
8	1	3	3	13	13	4	37	
9	2	6	2	10	11	3	34	
10	6	25	3	8	12	5	59	
11	6	14	1		1	1	23	
12	5	2				1	8	
合計	36	182	127	168	88	20	621	

総苞片は線形で先は鋭い刺になる。葉も羽状に大きく切れ込み裂片の先は鋭く刺がめだち、全草が刺におおわれている印象である。在来種の駆逐、家畜への影響等が懸念されることから、要注外来生物に指定されている。

生活段階の月変化 つぼみ・開花・結実は5-10月までと半年間の長きにわたりいつでもどの段階でも観察できる。

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

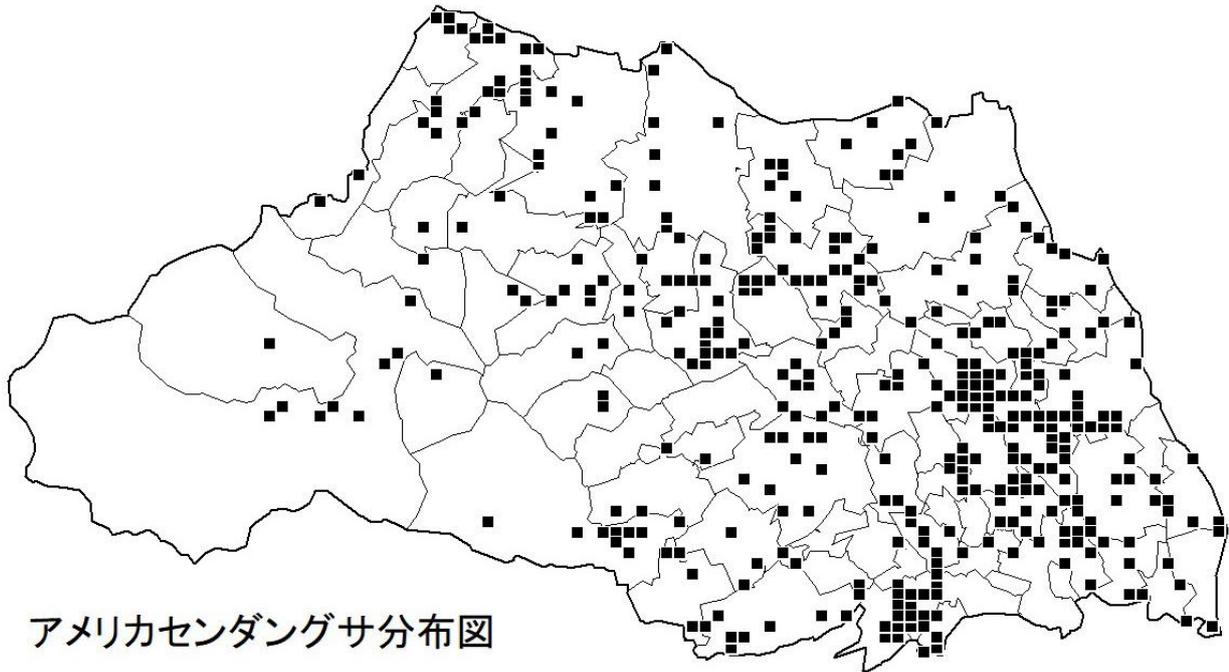
群落の大きさ・広がり 大きさは1-3株が一般的であるが、環境によっては群落を形成し面積を広げることがある。

アメリカオニアザミ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1													0
2													0
3													0
4	1	1	2	1									5
5	28	26	16	1	1								72
6	67	47	39	3	1						1		158
7	35	26	20	3	1								85
8	12	7	5						1				25
9	9	8	4										21
10	24	10	7	1									42
11	14	2	5								1		22
12	2	4	1						1				8
合計	192	131	99	9	3	0	0	0	2	0	2	0	438

当該種の消長 1960年代北海道で確認された。埼玉県内で立証する十分な調査データはないが、現在もとどまることなく拡大を続けているものと考えられる。当該種は環境への適応性が高く、種子生産力と分散能力に優れているという。また、鋭い刺を持つため、抜き取りなどの駆除が難しいこともあり、分布を広げているようである。さらに調査を続行し、精度の高いデータを取得し、その実態をもとに駆除等の具体的方策を検討する必要がある。



23 アメリカセンダングサ(キク科) *Bidens frondosa* その他の総合対策外来種

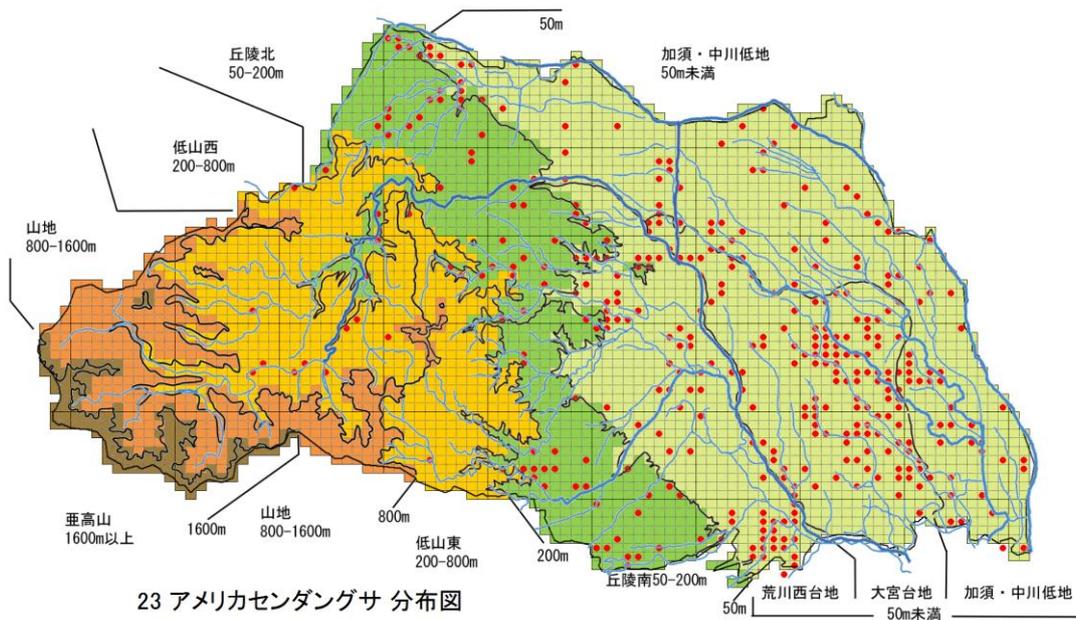


アメリカセンダングサ分布図

分布状況

3年間の調査では亜高山、山地帯以外の県内全域で確認されている。埼玉県全54区画中39区画から報告があった。

埼玉県植物誌1998では飯能西と本庄市を除いて全県域の分布が



23 アメリカセンダングサ 分布図

確認されているが、県レッドデータブック2011の調査においても、県内全域の分布が確認され、県内定着とみなされている。

アメリカセンダングサ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	48	9.2
河川敷	B	139	26.7
水田・休耕田・畑	C	205	39.3
市街地	D	129	24.8
合計		521	100

環境別報告件数 521件の報告があった。水田・休耕田・畑39.3%、河川敷26.7%と市街地24.8%の値は拮抗している。雑木林の報告もある。本種は湿りけのある開けた環境を好むようだが、さまざまな環境に適応し分布を広げているようだ。

種の概要 茎は切り口が4角で紫褐色を帯びる。葉は対生、上方で時に互生。3~8小葉にわかれる。

アメリカセンダングサ 生活段階の月変化(2016-2018年)							
月\生活段階	1	2	3	4	5	6	合計
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死	
1					1		1
2							0
3							0
4							0
5	8	22	1	4	3		38
6	13	101	6	13	8		141
7	1	64	7	7		1	80
8		34	6	5	1		46
9		36	36	61	18		151
10		12	39	76	71	2	200
11	1	3	11	19	27	12	73
12		1			3	5	9
合計	23	273	106	185	132	20	739

葉の先は細くとがり細かい鋸歯がある。頭花は黄色で舌状花は小さく外からは見えない。総苞外片は葉のように大きい。種子は扁平でかぎ状の棘が2本ある。水田雑草。要注意外来植物とされている。

生活段階の月変化 つぼみ・開花・結実は9-10月に多く見られる。

群落の大きさ・広がり 大きさは株数では10-99株が圧倒的である。

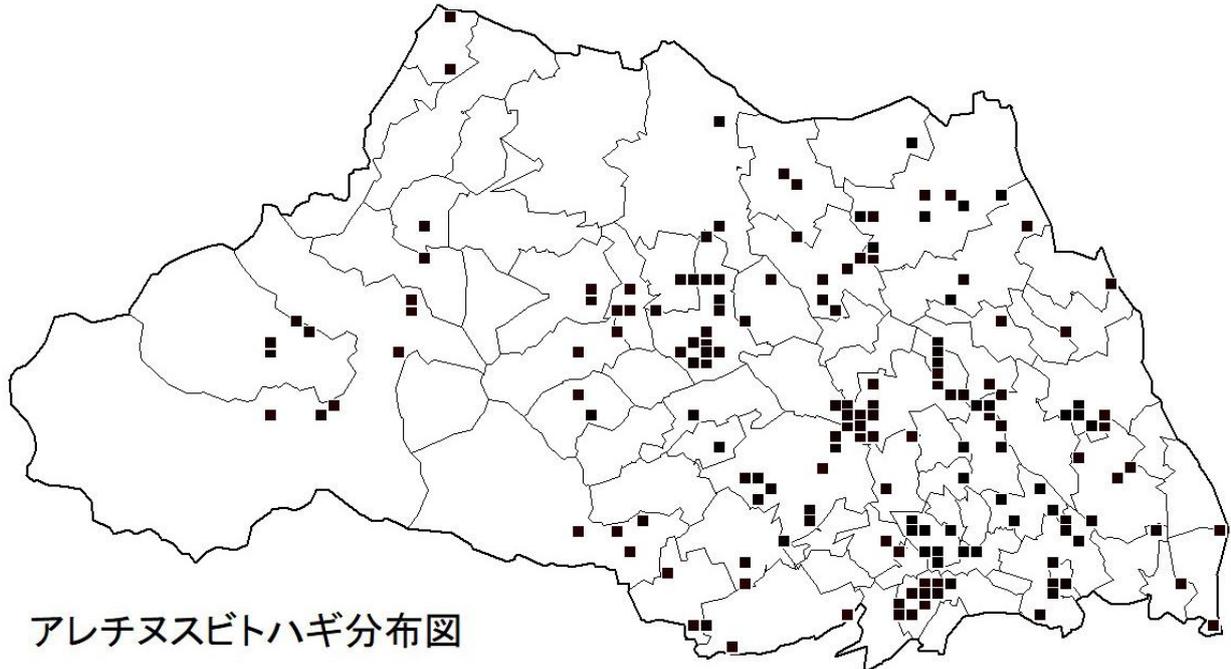
複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

アメリカセンダングサ 群落の大きさ・広がり(2016-2018年)													
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	合計
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1		1											1
2													0
3													0
4													0
5	3	6	17	6	3								35
6	14	17	57	23	12	1			2	1		1	128
7	2	16	31	9	2	3		2		2	1	1	69
8	3	5	19	10	1					2		2	42
9	7	24	49	12	1				2		1		96
10	7	18	62	18	3							2	110
11	4	8	12	8	2								34
12	1	1	3							1			6
合計	41	96	250	86	24	4	0	2	4	6	2	6	521

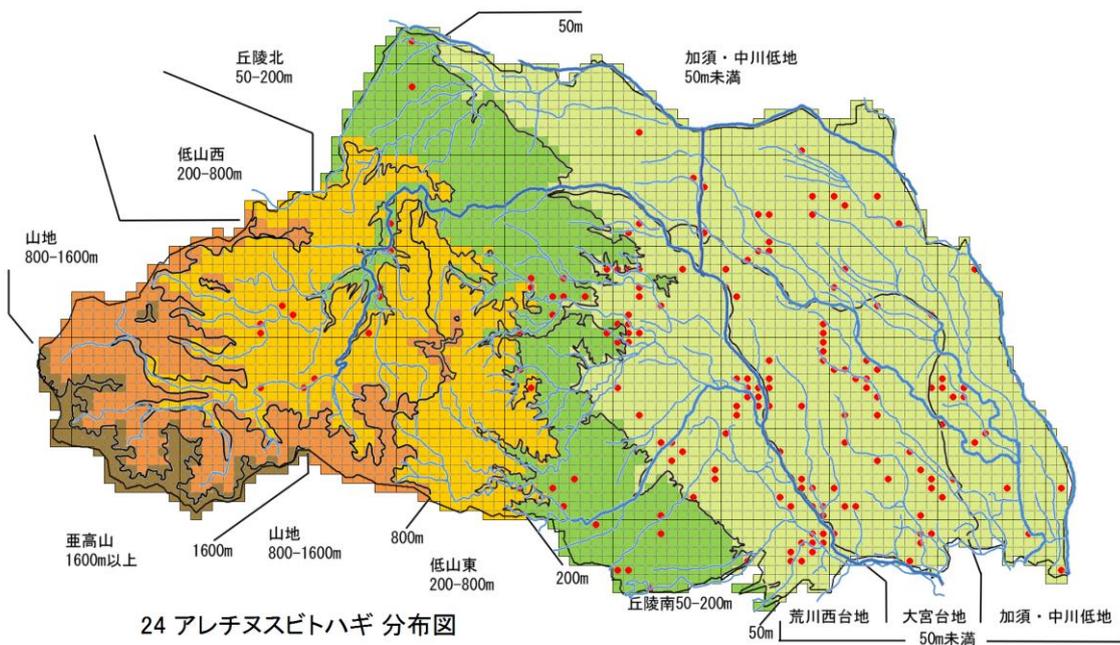
当該種の消長 日本には、大正時代に渡来し、1920年琵琶湖畔に群生していたという。既に全国各地で定着しているが、侵入経路等のいきさつは明らかでない。本来は水辺や湿地を好む植物だが、土壌の種類、乾湿などへの適応性が大きいので、全県的な広がりを見せたと考えられる。



24 アレチヌスピトハギ(マメ科) *Desmodium paniculatum* その他の総合対策外来種



アレチヌスピトハギ分布図



24 アレチヌスピトハギ 分布図

分布状況

3年間の調査では加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵北・丘陵南、低山で確認があった。今回の調査では埼玉県全54区画、中34区画で報告

があった。

埼玉県植物誌 1998 では見られなかった越谷、三郷、八潮、川口、緑区にも分布が確認される。県レッドデータブック 2011 年の調査では丘陵南の確認は無かった。果実が人や動物に付き運ばれるため、分布を拡大していく可能性がある。

アレチヌスピトハギ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	37	15.7
河川敷	B	84	35.7
水田・休耕田・畑	C	70	29.8
市街地	D	44	18.7
合計		235	99.9

環境別報告件数 235 件の報告があった。最も多い報告環境は河川敷 35.7%、次いで水田・休耕田・畑で 29.8%である。市街地、雑木林でも 15%程度の報告がある。値はいずれも拮抗していて、どんな環境にも適応するようだ。

種の概要 葉は3小葉からなり、小葉は長楕円形、下面は毛が多い。茎の先や葉腋に紅紫色の蝶形花を数個付ける。果実は扁平で4-6節にくびれ、鉤状に曲がった微毛を密生し衣類や動物によく付いて運ばれる。

アレチヌスビトハギ 生活段階の月変化(2016-2018年)							
月\生活段階	1	2	3	4	5	6	合計
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死	
1							0
2							0
3							0
4				1		2	3
5	5	22					27
6	1	34	3	1	4		43
7		25	3	1	1	1	31
8		6	1	5	2		14
9		5	15	47	35	1	103
10		8	6	23	41	2	80
11				1	11	4	16
12					2	3	5
合計	6	100	28	79	96	13	322

生活段階の月変化 つぼみ・開花・結実は6月から見られるが、開花・結実は9-10月に盛んに見られる。

群落の大きさ・広がり 大きさは10-99株が一般的でそれより一段少ない場合と多い場合が普通に見られる。群落面積は広がらない。

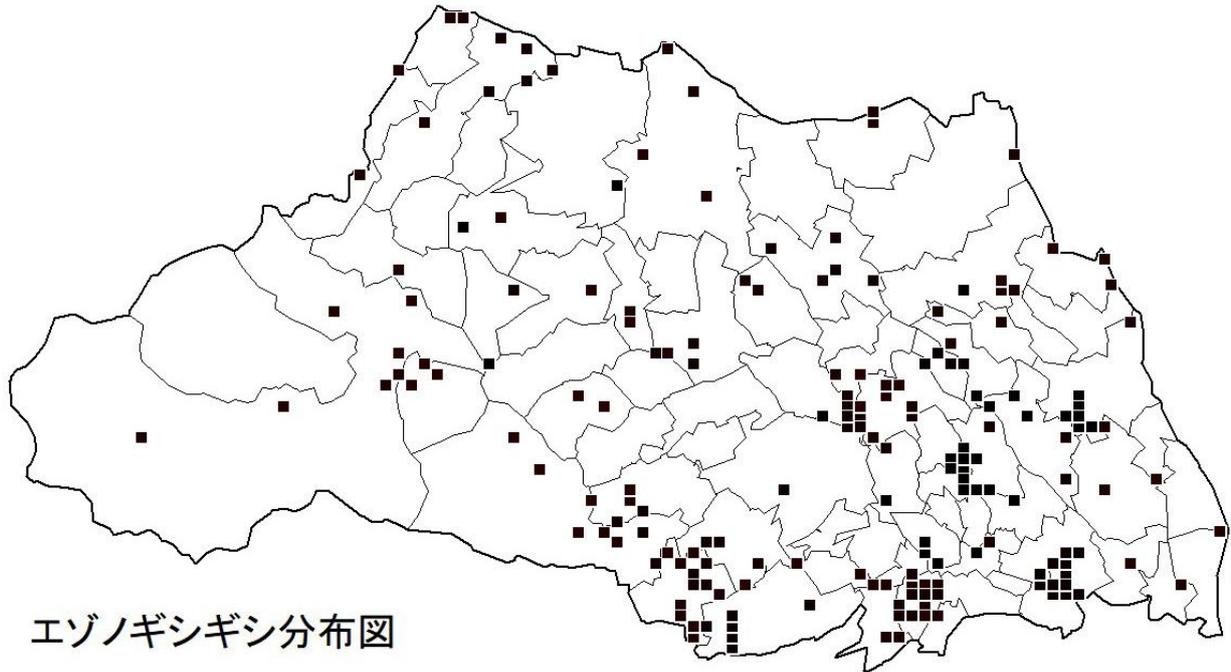
複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

アレチヌスビトハギ 群落の大きさ・広がり(2016-2018年)													
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	合計
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1													0
2													0
3													0
4			1	2									3
5	2	8	9	8									27
6	1	10	22	5	3	1							42
7	1	3	17	6	1	1		1					30
8	1		4	5						1			11
9	6	10	30	7	1								54
10	4	9	27	9	3				1				53
11		1	5	3	3								12
12	1		2										3
合計	16	41	117	45	11	2	0	1	1	1	0	0	235

当該種の消長 1965年に大阪で見いだされ、荒地、道端に広がる。関東以西に多いという。県内では1998年代に限定的な分布であったが、今回の調査でも分布の拡大は見られない。増減について調査員の感触によれば「変わらず」が圧倒的に多い。「やや減少」と「やや増加」の少数意見は拮抗している。環境に関する影響では、アレロパシー効果が懸念されているが、現在のところそのような報告は見られない。



25 エゾノギシギシ(タデ科) *Rumex obtusifolius* その他の総合対策外来種

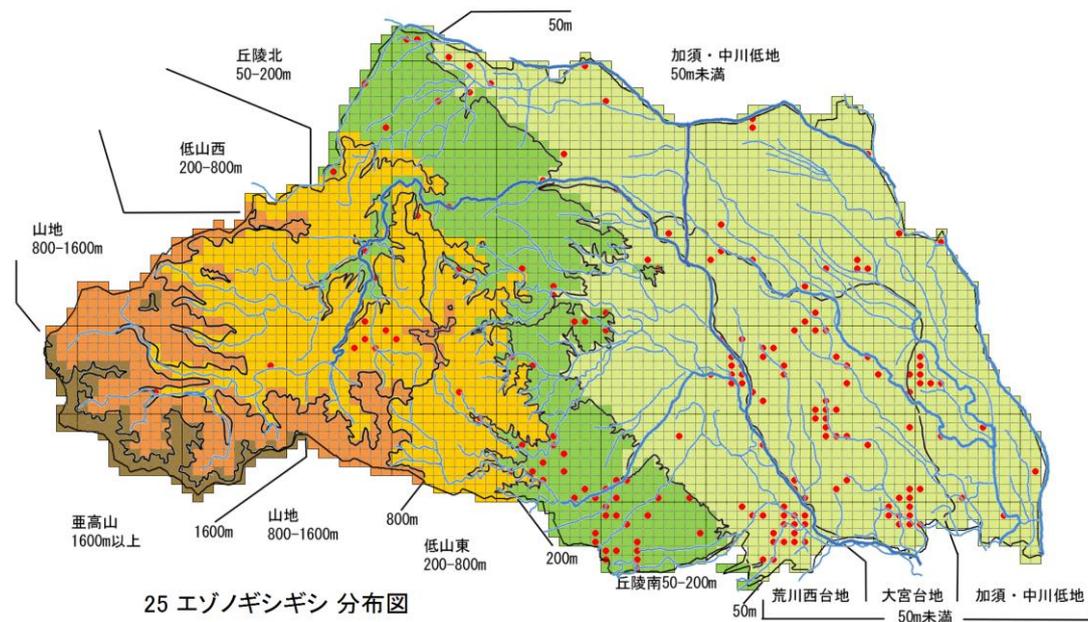


エゾノギシギシ分布図

分布状況

3年間の調査では亜高山、山地帯以外のほぼ県内全域で確認されている。今回の調査では埼玉県全埼玉県全54区画中40区画で確認された。

埼玉県植物誌1998によれば行田、日高、秩父南



25 エゾノギシギシ 分布図

を除くほぼ県全域に分布となっている。県レッドデータブック2011の調査でも県内全域に定着したとみなされている。

エゾノギシギシ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	25	9.5
河川敷	B	104	39.4
水田・休耕田・畑	C	77	29.2
市街地	D	58	22.0
合計		264	100.1

環境別報告件数 報告件数は264件であった。最も多いのが河川敷で39.4%、次いで水田・休耕田・畑29.2%市街地22%、雑木林の報告は少ない。日当たりの良い湿地を好む植物というが、環境を選ばず至るところで生育しているようだ。

種の概要 ギシギシに似るが、根生葉は長い柄があり、ギシギシより幅が広く縁は細かく波打つ。中

エゾノギシギシ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4	1	2					3	
5	1	24	25	28	19	2	99	
6		10	9	34	43	10	106	
7		5	7	11	16	7	46	
8		4		1	5	2	12	
9		12	2	7	9		30	
10	13	41	2	2	4	1	63	
11	10	18	1				29	
12	4	1					5	
合計	29	117	46	83	96	22	393	

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

中央脈が赤みを帯びる。茎先に沢山の花を輪生し花穂になる。花穂はギシギシより細長く、全体に赤褐色に見える。果実の翼は卵形で縁に刺がある。繁殖力が強く、希少種の生育環境にも侵入するため、在来植物や希少種の生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高いとされる。

生活段階の月変化 幼植物からつぼみ・開花・結実までのすべての生活段階が5-10月の間同時進行で行われている。

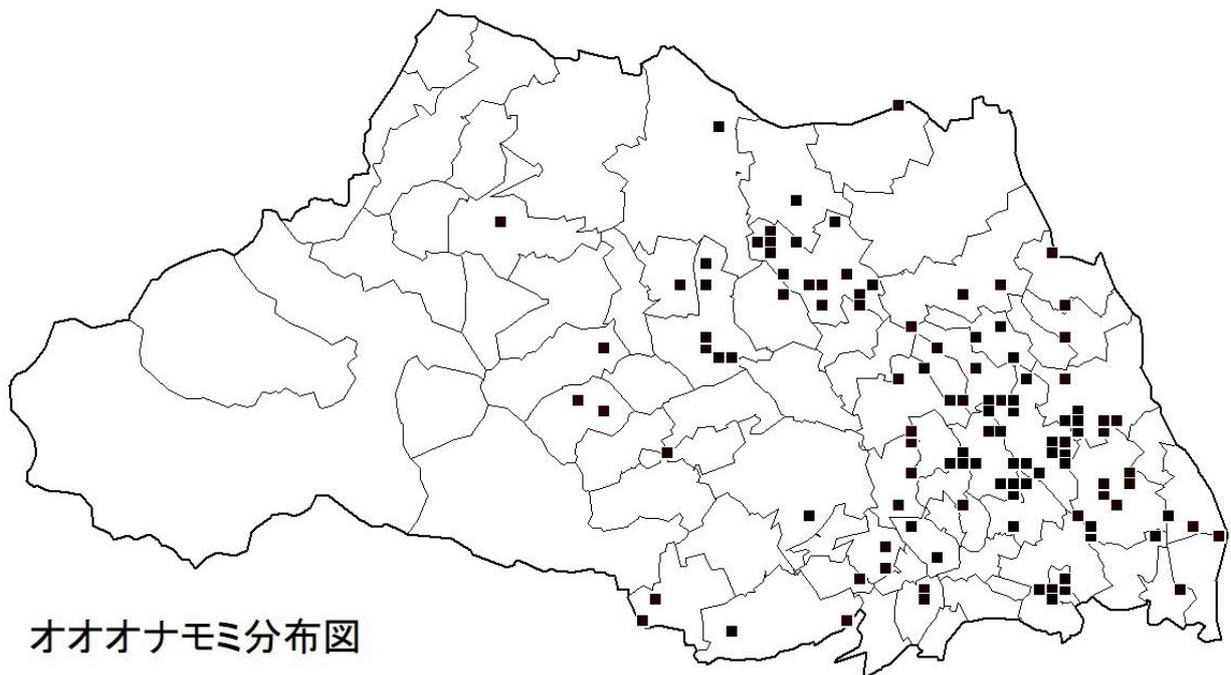
群落の大きさ・広がり 株数の大きさは 10-99 株が一般的でそれより一段少ない場合と多い場合が普通に見られる。群落の広がりには 100 m²未満が一般的である。

エゾノギシギシ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1													0
2													0
3													0
4		1	2										3
5	4	12	29	5	6					1	2		59
6	10	5	36	8	4	2				1			66
7		7	16	3	1								27
8		1	5	1						1			8
9		3	10		4				1		2		20
10	3	3	13	19	9					2		1	50
11	4	11	6	4			1				1		27
12		3		1									4
合計	21	46	117	41	24	2	1	0	1	5	5	1	264

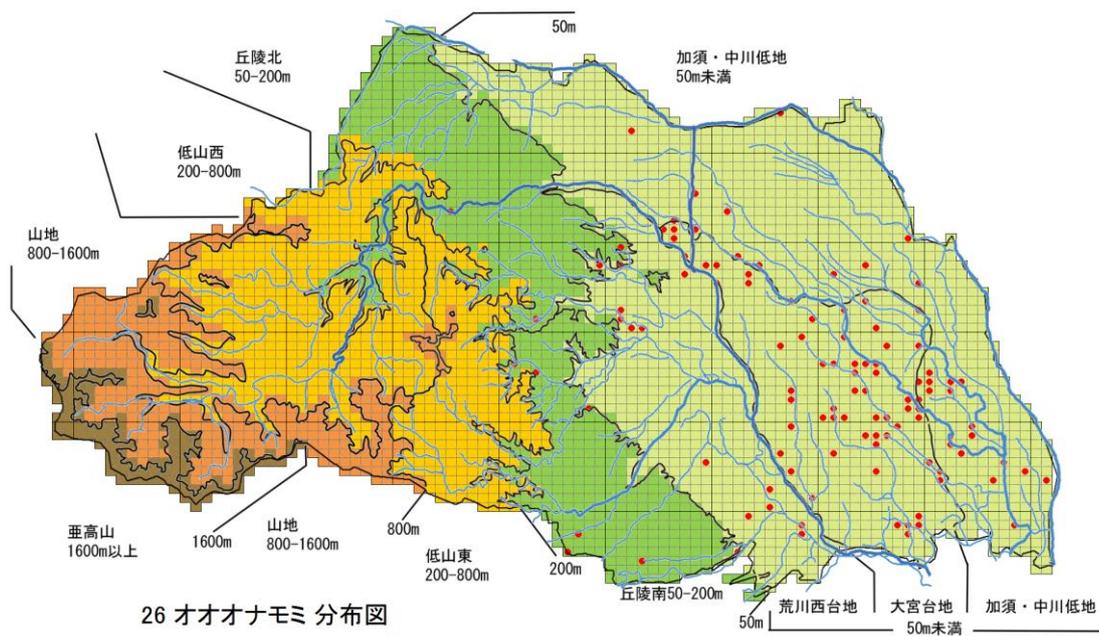
当該種の消長 明治中期に渡来したと考えられる。1909年に北海道で確認された。その後急激に分布を広げたといえる。本県では1988年時点で、低地から低山の少し湿った道端や荒地の日だまりに普通に見られるという記載がある。在来植物への競合を懸念して各地で刈り取りがおこなわれているようだが、根茎からの繁殖が旺盛で目立った効果は上がらないという。分布拡大の状況に注意を払っていきたい。



26 オオオナモミ(キク科) *Xanthium occidentale* その他の総合対策外来種



オオオナモミ分布図



26 オオオナモミ 分布図

分布状況

本種は大宮台地と加須・中川低地の南東部に多く分布する。河川に沿って分布することから土壌中の水分が大きく関係していると思われる。

埼玉県植物誌1998によれば、八

高線以东の平地、丘陵地に普通に分布するとある。さらに県レッドデータブック 2011 の調査では都幾川、東秩父以外の全県域で確認されている。今回の調査では埼玉全 54 区画中 24 区画から報告があった。

環境別報告件数 3年間の報告件数は149件である。報告の多かったのは水田・休耕田・畑 51.0%、河川敷 38.3%で、この二つが圧倒している。市街地にも見られるが多くない。水分の多い土壌が生育に大きく関係している可能性がある。

オオオナモミ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	3	2.0
河川敷	B	57	38.3
水田・休耕田・畑	C	76	51.0
市街地	D	13	8.7
合計		149	100

種の概要 河川・池沼の端や。農耕作地に多く生育する。オナモミに似るが、茎は暗紫色を帯びるものが多い。葉には長い柄があり、

オオオナモミ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4						1	1	
5		3					3	
6	3	27				1	31	
7	1	7				1	9	
8		3		1	1		5	
9		5	6	13	20	1	45	
10		5	4	3	45	3	60	
11			1	1	10	4	16	
12					4	2	6	
合計	4	50	11	18	80	13	176	

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

時期としては10月が最も目立つ時期といえる。

群落の大きさ・広がり 株数の規模は10-99株が一般的で、それより一段少ない場合と一段多い場合がよく見られる。

オオオナモミ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1													0
2													0
3													0
4				1									1
5	1		1	1									3
6	5	7	11	2	3								28
7	2		4	2						1			9
8		2	2		1								5
9	1	9	14	8	4	1							37
10	4	6	18	11	3					2	2	2	48
11	2	2	4	4						1			13
12		2	1		1					1			5
合計	15	28	55	29	12	1	0	0	0	5	2	2	149

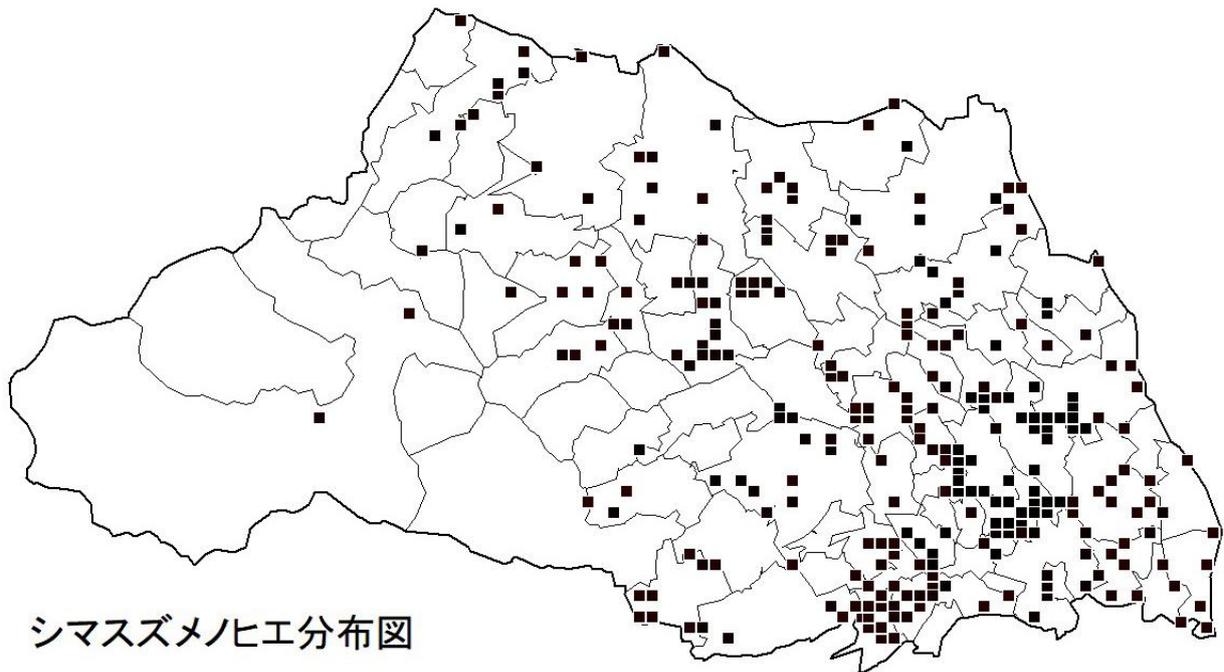
当該種の消長

1929年、岡山県で確認された。農林水産業に係る被害として、世界的に見られる農耕地雑草の一つで、畑作物、牧草などの栽培に支障をもたらすほか、有毒成分を含むため、家畜の採食を妨げることが問題とされている。

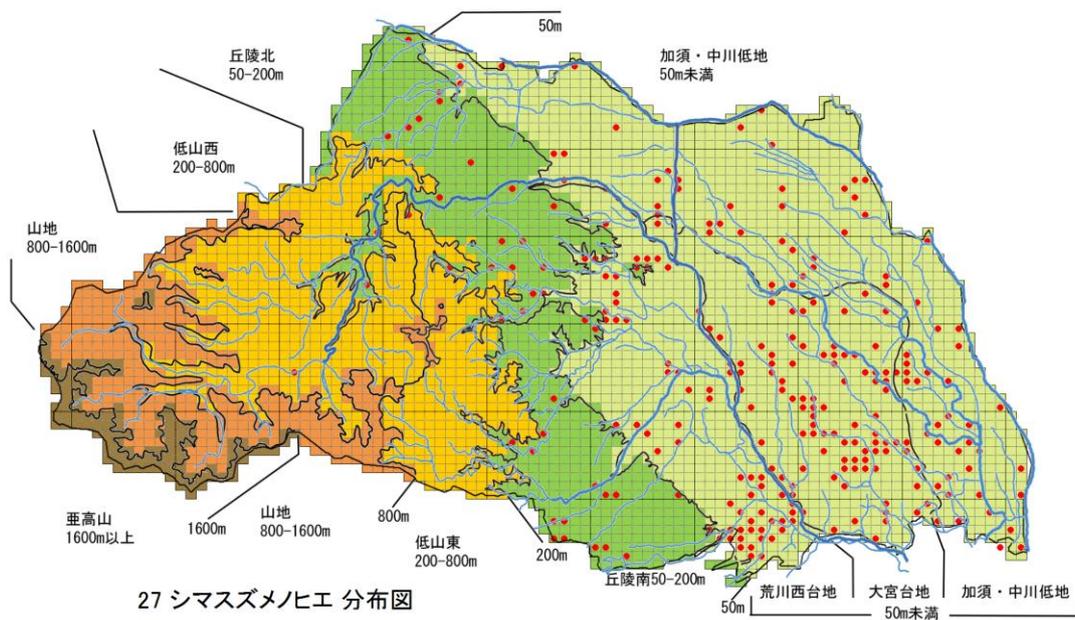


その他

オナモミとオオオナモミは区別しにくい。両者の区別点は図鑑によりさまざま、決定的な区別点は不明瞭のままである。果実の大きさやとげの数などは特徴になると考えるが、分類に関する詳細な資料が望まれるところである。



シマスズメノヒエ分布図



27 シマスズメノヒエ 分布図

分布状況

今回の調査では加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北で分布が確認された。低山西、低山東の分布はほとんどない。埼玉全54区画中36区画から報告があった。

埼玉県植物

誌1998の記録によればその分布域は今回の調査と重なる。県レッドデータ2011の調査もほぼ同様の結果を得た。分布はほぼ定着しているといつてよい。

環境別報告件数 報告件数は377件であった。市街地32.9%、水田・休耕田・畑32.1%、河川敷28.1%と三者が拮抗している。雑木林を除きほとんど環境を選ばず、どこにも出現する外来種である。雑木林の出現率は低いのは、生育に日照が十分得られないことが原因していると考えられる。

シマスズメノヒエ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	26	6.9
河川敷	B	106	28.1
水田・休耕田・畑	C	121	32.1
市街地	D	124	32.9
合計		377	100

種の概要 イネ科の外来種としてよく目立つ存在である。環境別報告件数からは本種は環境を選ばないといえるが、本来的には比較的湿潤地を好む植物であることが想定できる。本種の特徴は小穂に毛

があり、その毛がやや長めであることからチクゴスズメノヒエやキシユスズメノヒエと区別することができる。また本種のふさは3-6本であることから、もっとふさの数が多いタチスズメノヒエと区別することができる。株立ちになっていることが多く直立する。ふさは小穂が2-3列規則正しく並び柱頭と葯が黒紫色であることを特徴とする。

シマスズメノヒエ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4							0	
5		1	1	5	3		10	
6		8	17	73	27		125	
7		8	16	57	34		115	
8		1	4	33	21		59	
9		4	15	54	51		124	
10		17	19	56	47	3	142	
11		4	1	4	12	8	29	
12	2			1	5	3	11	
合計	2	43	73	283	200	14	615	

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

生活段階の月変化 イネ科の特徴として、つぼみと開花

と結実は一見して区別しにくい。その結果、5月から10月までどの生活段階もみられることになる。

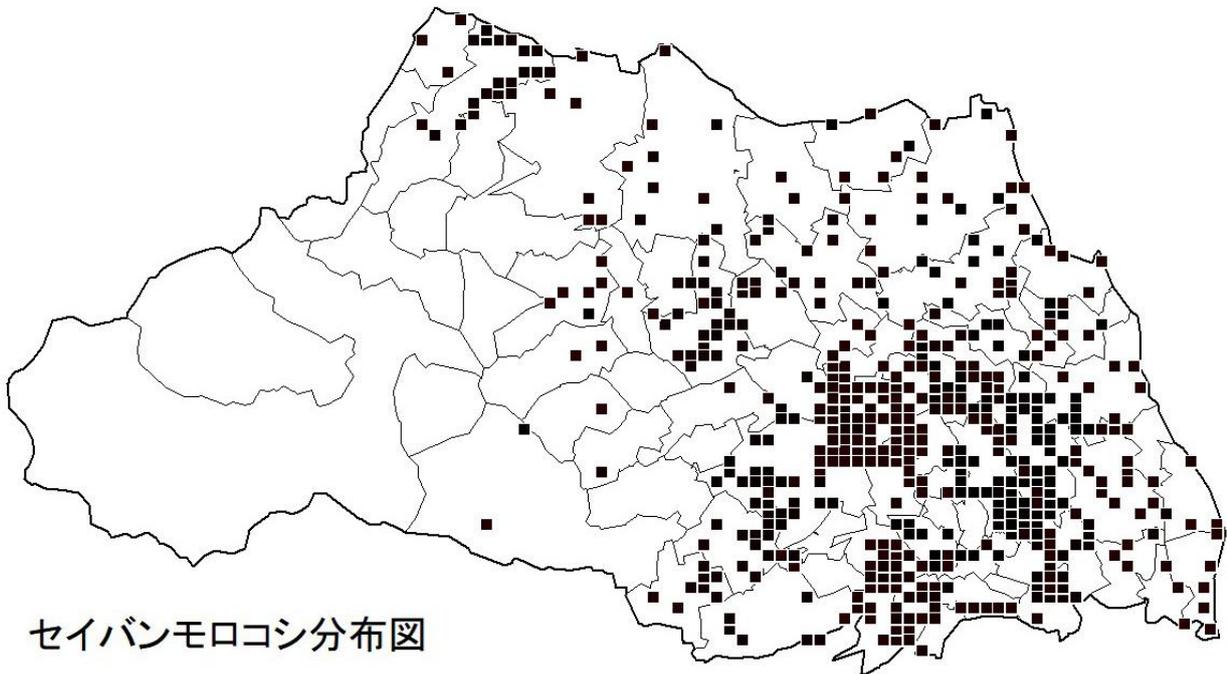
群落の大きさ・広がり 大きさは10-99株が一般的である。単立的になることもあるし100-999株の

シマスズメノヒエ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
g-lはm ²													
1													0
2													0
3													0
4													0
5	2	1	3		1						1	1	9
6	7	11	47	13	3	1		1					83
7	3	5	38	14	1				1	5	1	1	69
8	1	4	21	8	1					2	2	3	42
9	2	8	32	19		2				4	2		69
10	3	11	26	16	8	5				5	4	1	79
11	3	4	7	4						1		1	20
12	1	1	4										6
合計	22	45	178	74	14	8	0	1	8	14	9	4	377

大きくなることもあり、生育地によりさまざまな大きさを観察することができる。

当該種の消長 1915年に小笠原で気づかれたのが最初である。その後主に関東以南に分布を広げた。暖地性の外来種である。本県では1998年において亜高山帯、山地帯、低山西、低山東を除く全域に分布が確認されており、2011年においても分布に大きな変動はなく、今回の調査でもほぼ同様の分布を示しているところから安定状態に達していると思われる。



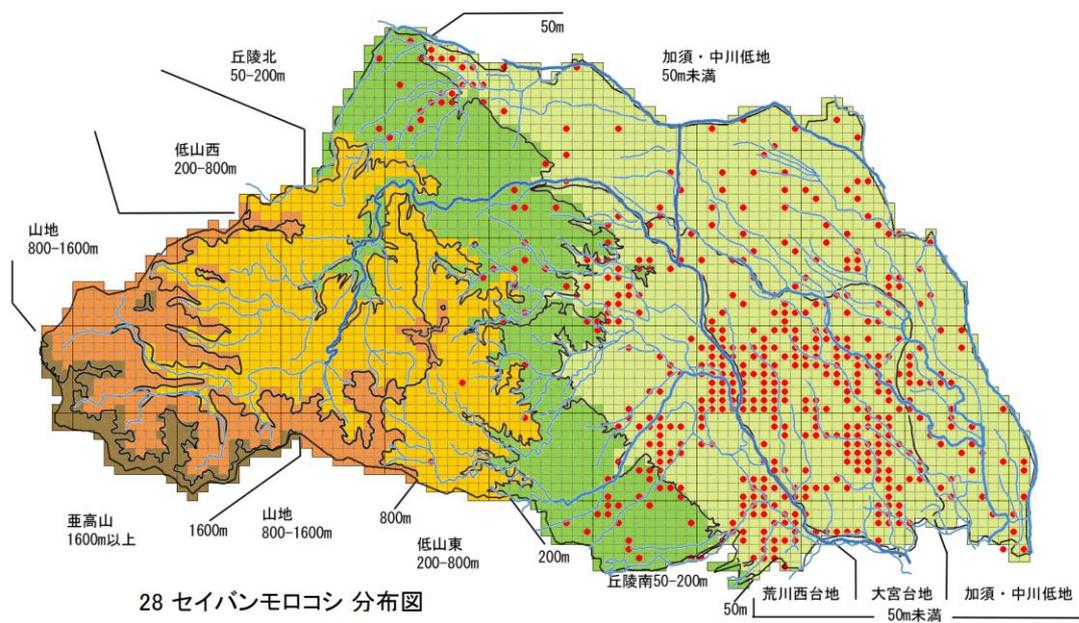


セイバンモロコシ分布図

分布状況

3年間の調査では、50m未満の荒川西台地、大宮台地からの報告が特に多かった。加須・中川低地、丘陵北、丘陵南からも多くの報告があった。

埼玉県植物誌 1998



28 セイバンモロコシ 分布図

によれば低山東、低山西、山地、亜高山を除く県内のほぼ全域に分布している。県レッドデータブック 2011 の調査では荒川西台地、大宮台地、加須・中川低地の分布が確認された。今回調査では埼玉県全 54 区画中 37 区画からの報告があり、分布は拡大しているとみることができる。

セイバンモロコシ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	23	2.7
河川敷	B	333	39.7
水田・休耕田・畑	C	223	26.6
市街地	D	258	30.8
合計		839	99.8

環境別報告件数 839 件の報告があった。報告件数が多い外来種の一つである。生育地は河川敷 39.7%、次いで市街地 30.8%、水田・休耕田・畑 26.6%が並ぶ。雑木林は極端に少ない。雑木林を除けば環境にかかわらず至るところに分布を広げている。

セイバンモロコシ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4							0	
5	1	22	13	7			43	
6		40	58	135	26	1	260	
7	1	48	41	81	21		192	
8		12	13	33	17		75	
9		14	26	103	62	1	206	
10	5	47	50	132	159	3	396	
11	3	8	12	24	93	12	152	
12	1	2	2	2	8	9	24	
合計	11	193	215	517	386	26	1348	

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

種の概要 芽生えの段階ではススキと区別しにくいところがある。一般にススキは大きな株立ちとなるが、セイバンモロコシは株立ちにならず四方に地下茎を伸ばし均一に茎(稈)を立てる。生命力は強く、地下茎の切れ端があればそこから新芽を出して広がっていく。セイバンモロコシの侵入によってススキが駆逐されようとしている状況をよく見かけるが、分布域で比較すると、ススキは山地帯や低山帯など山間部も含めて県全域

に分布しているのに対して、セイバンモロコシは山間部にはまだ侵入していない。

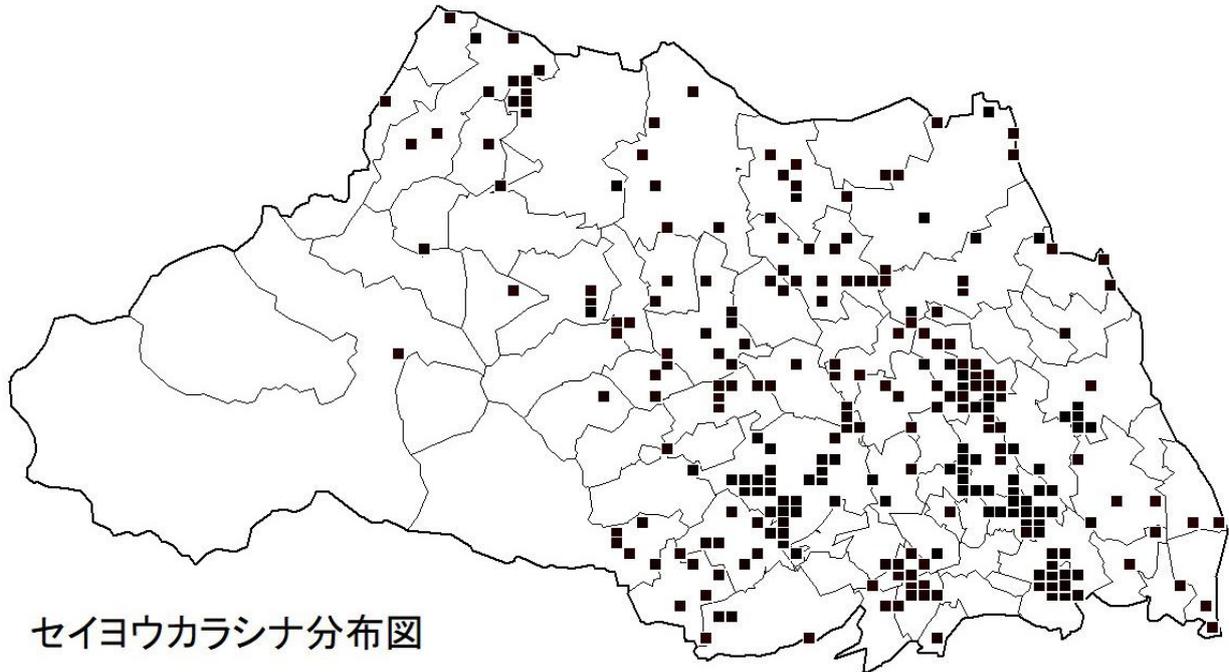
生活段階の月変化 イネ科の特徴として、つぼみ、開花、結実は一見して区別できないものが多く、生活段階を分けることが難しい。開花の時期も連続していて中心もはっきりしない。6月から11月まで半年間にわたりいつでもすべての生活段階が観察できる。

セイバンモロコシ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計	
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l		
	a-fは株	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1														0
2														0
3														0
4														0
5	4	4	6	5	4	4			1	4			4	36
6	5	16	67	33	16	23		1	2	5	2	2	2	172
7	4	3	28	30	18	19		1	2	4	2	8	8	119
8		3	16	12	4	1				5	3	4	4	48
9	3	12	38	26	12	5				7	6	13	13	122
10	2	10	49	37	27	22			5	6	8	55	55	221
11	6	5	23	10	5	8		2		1	4	43	43	107
12			4	4	1	2						3	3	14
合計	24	53	231	157	87	84	0	4	10	32	25	132	132	839

群落の大きさ・広がり 大きさは10-99株が一般的であるが、100-999株の大きさにまとまることも多い。数株で立ち上がることは少ない。

当該種の消長 畑の雑草として世界的に有名である。太平洋戦争後関東地方に見いだされるようになり、その後全国各地に広がったとされる。埼玉県においては1998年の調査で低地・台地上に広く分布しており、2011年の調査においてもほぼ同様の分布である。今回の調査では県北の調査点も加わって全県分布となり、台地や低地にはしっかり定着し安定状態にあるものと考えられる。

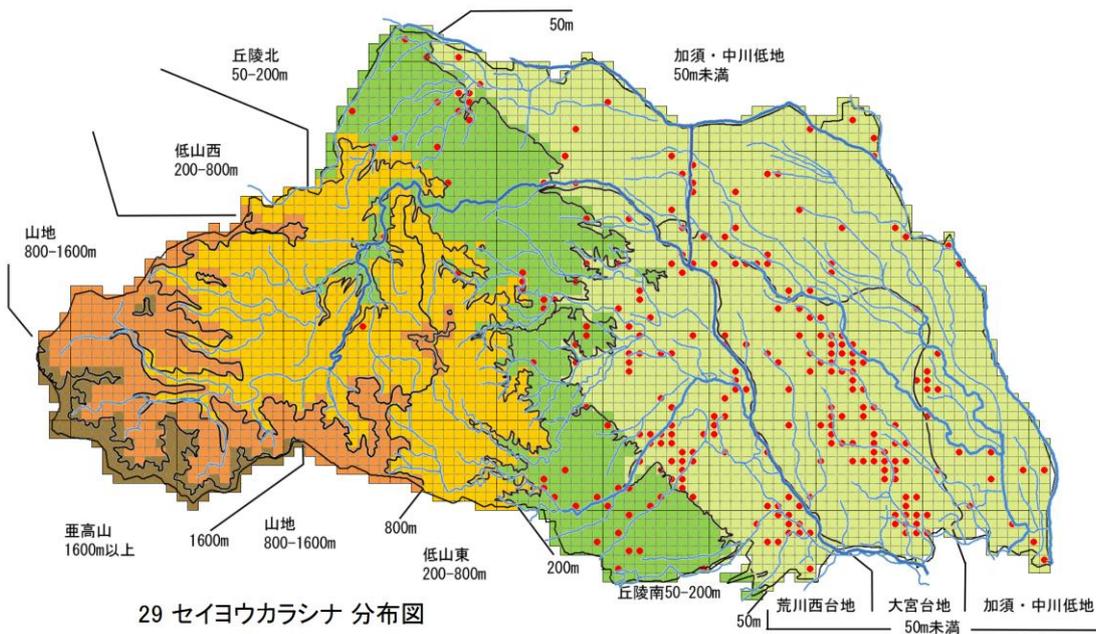




セイヨウカラシナ分布図

分布状況

3年間の調査では加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵南、丘陵北の報告が多かった。低山西、低山東、山地、亜高山の報告はほとんどない。埼玉県全54区画中37



29 セイヨウカラシナ 分布図

区画から報告があった。

埼玉県植物誌 1998 によれば今回の調査結果とよく似ている。県レッドデータブック 2011 の調査でほぼ同様の結果となっている。

セイヨウカラシナ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	8	2.1
河川敷	B	221	58.5
水田・休耕田・畑	C	94	24.9
市街地	D	55	14.6
合計		378	100.1

環境別報告件数 報告件数は378件であった。最も報告件数の多い環境は河川敷 58.5%である。土手を埋め尽くすように咲く姿は一つの風物詩になっている。次いで水田・休耕田・畑が 24.9%を占める。こちらは土手を埋め尽くすような光景にはならないが、ごく普通に

セイヨウカラシナ 生活段階の月変化(2016-2018年)							
月\生活段階	1	2	3	4	5	6	合計
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死	
1		2					2
2							0
3			1	1	1		3
4		1	5	19	3		28
5		1	13	69	106	28	217
6	1	3		5	42	46	97
7	3			1	5	14	23
8	1	1		1	2	1	6
9	1	2	1		1	2	7
10	26	35			6	3	70
11	3	27		2		3	35
12	5	21					26
合計	40	93	20	98	166	97	514

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

短い場合もあるが茎を抱くことはない。開花の時期を比較すると、一般的には最初セイヨウアブラナが先に開花して、途中からセイヨウカラシナの開花が引き継ぐ格好になる。

生活段階の月変化 開花・結実は5月に集中する。10月以降の芽生えは越冬することになるのか。

見かける状況にある。市街地でも14.6%を占める。雑木林でも見かけないわけではないが、その数はきわめて少ない。

種の概要 土手を黄色に埋め尽くすものはすべてこのセイヨウカラシナ(別名カラシナ)と思われがちだが、最近ではセイヨウアブラナの侵入もあって、よく観察して区別する必要がある。簡単な区別点は、セイヨウカラシナの葉は葉柄があるのに対して、セイヨウアブラナは葉柄がなく茎を抱く。セイヨウカラシナの葉柄

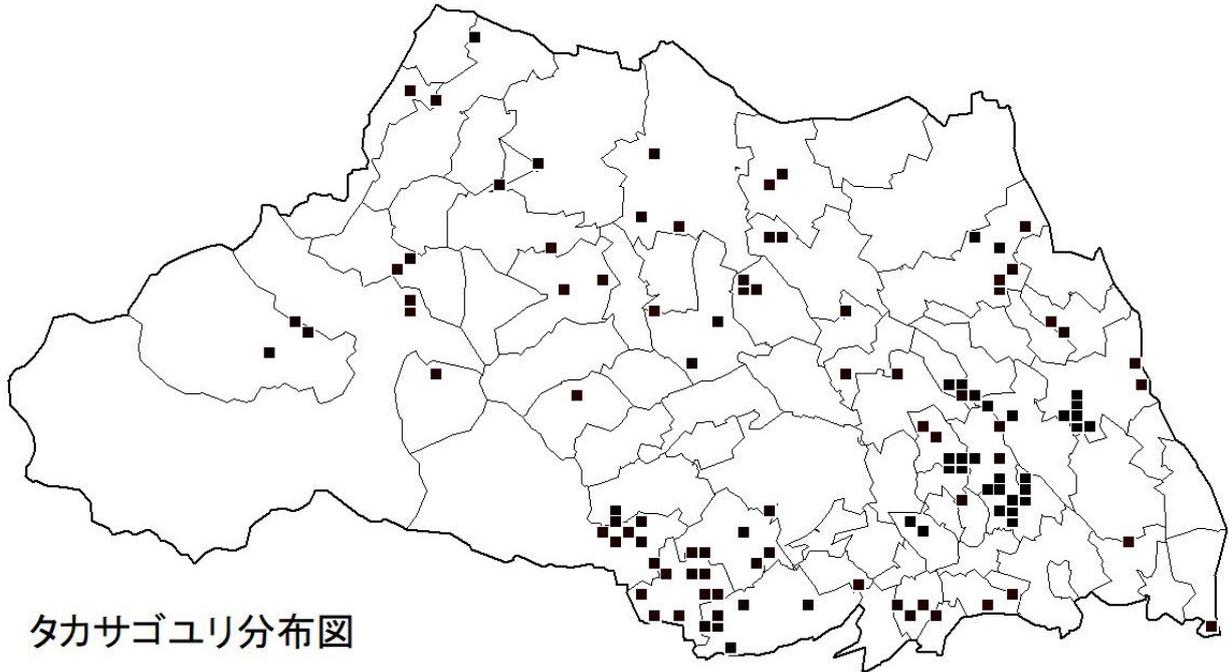
セイヨウカラシナ 群落の大きさ・広がり(2016-2018年)													
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	合計
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1					1	1							2
2													0
3					1								1
4	3	2	8	6	1								20
5	3	11	39	26	15	15			1	1	14	10	135
6	1	9	35	12	9	11		1			2	3	83
7		3	6	3	1	3				1		1	18
8		2	2										4
9	1		1								1	2	5
10	4	12	10	7		9			2	1	6	6	57
11	3	4	9	3		3				2	3	2	29
12		2	12	4	3	1					1	1	24
合計	15	45	122	61	31	43	0	1	3	5	27	25	378

群落の大きさ・広がり 大きさは株数では10-99株が圧倒的である。群落面積の報告では100m²未満、または100m²以上となっており、土手斜面に生育する群落は株数では表現しにくい。

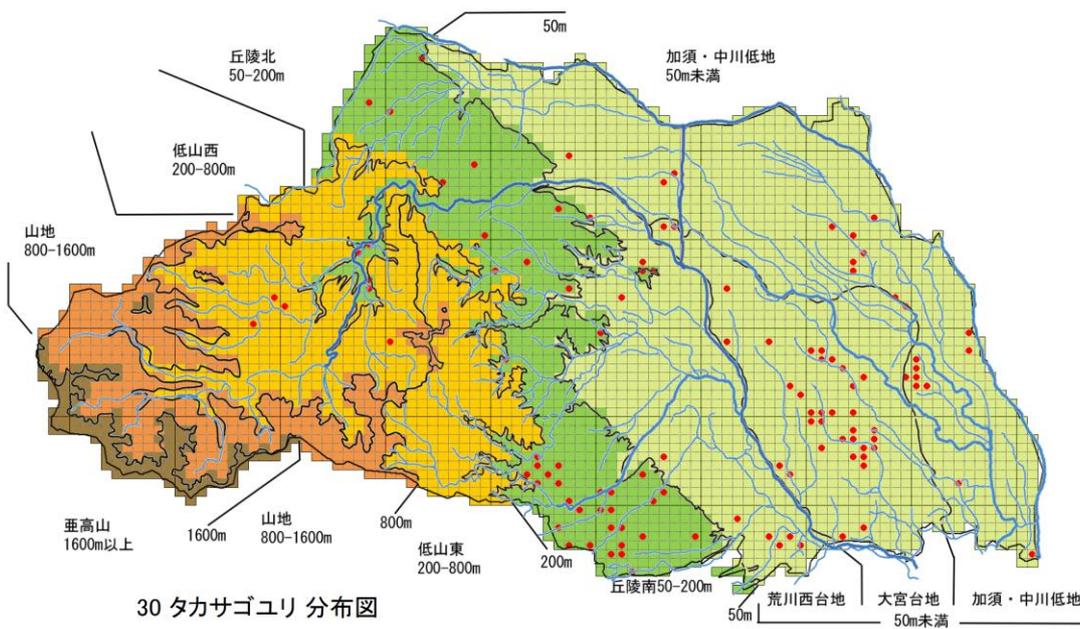
当該種の消長 「日本帰化植物図鑑」によれば侵入時期ははっきりしない。県内の状況は、1998年丘陵帯以東で分布が確認されていた。2011年においても丘陵帯以東で分布が確認されている。今回の調査は、およそ2011年の分布を維持していることが想定される。本種は生態系の中で安定的な地位を獲得していると考えられる。



30 タカサゴユリ(ユリ科) *Lilium formosanum* A.Wallace その他の総合対策外来種



タカサゴユリ分布図



30 タカサゴユリ 分布図

分布状況

3年間の調査では、加須・中川低地、大宮台地、丘陵南丘陵北の報告が多かった。荒川西台地の報告は少なかった。今回の調査では埼玉全54区画中29区画から報告があった。

報告があった。

埼玉県植物誌1998には記載がなく、県レッドデータブック2011の調査では県北と県南にごくわずか数件の報告しかない。これらと比較すれば本種は近年爆発的に増えた外来種の一つとして位置づけることができる。

環境別報告件数 131件の報告があった。生育地は市街地が最も多く全体の66.4%を占め圧倒的である。次いで水田・休耕田・畑が、19.8%となる。雑木林や河川敷は少ない。一般的には比較的人家の近くに生育しているこ

タカサゴユリ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	11	8.4
河川敷	B	7	5.3
水田・休耕田・畑	C	26	19.8
市街地	D	87	66.4
合計		131	99.9

とが多く、市街地を特徴づける種である。

種の概要 近縁種にシンテッポウユリがあり、紛らわしい。花が咲けば本種は花被片の色が白地に赤

タカサゴユリ		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3							0	
4							0	
5		5	8				13	
6		5	25	2	1		33	
7		2	12	11	2	2	29	
8				5	10	2	17	
9			2	2	9	7	20	
10			1	1	2	19	25	
11		2				5	13	
12							0	
合計		14	48	21	24	35	8	150

褐色の帯が入るので、すべて白のシンテッポウユリとは区別がつく。とりあえず少しでも薄い褐色帯が認められれば本種として扱うのがよい。成葉だけのときは葉の幅で区別することになるが、この形質は個体ごとに連続して区別はかなり困難である。

生活段階の月変化 5-6月に芽生え、8-9月に開花し、10月には果実が目立つようになる。季節感のある外来種である。

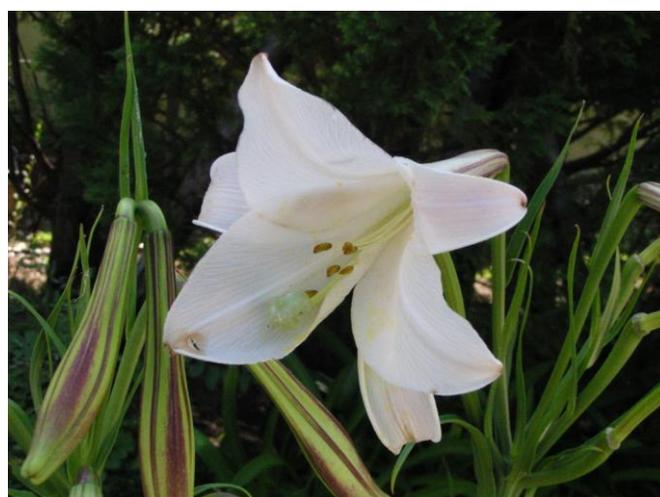
複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

群落の大きさ・広がり 単立から数株で生育していることが多い。集団になることがあっても数十株

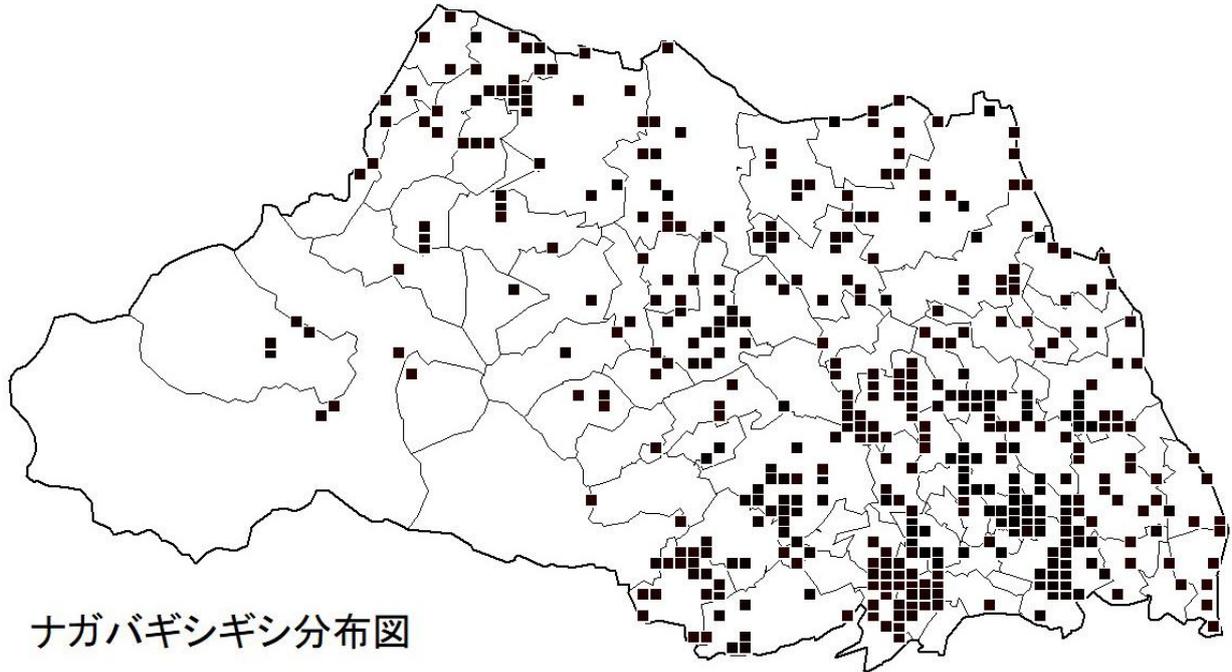
タカサゴユリ		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1													0
2													0
3													0
4													0
5	7	4	1										12
6	15	10	8										33
7	9	7	10										26
8	2	3	4	2								1	12
9	5	10	1										16
10	14	3	5										22
11	5		4	1									10
12													0
合計	57	37	33	3	0	0	0	0	0	0	0	1	131

どまりである。生育が確認できる時期は5月から11月まで7カ月に及ぶ。

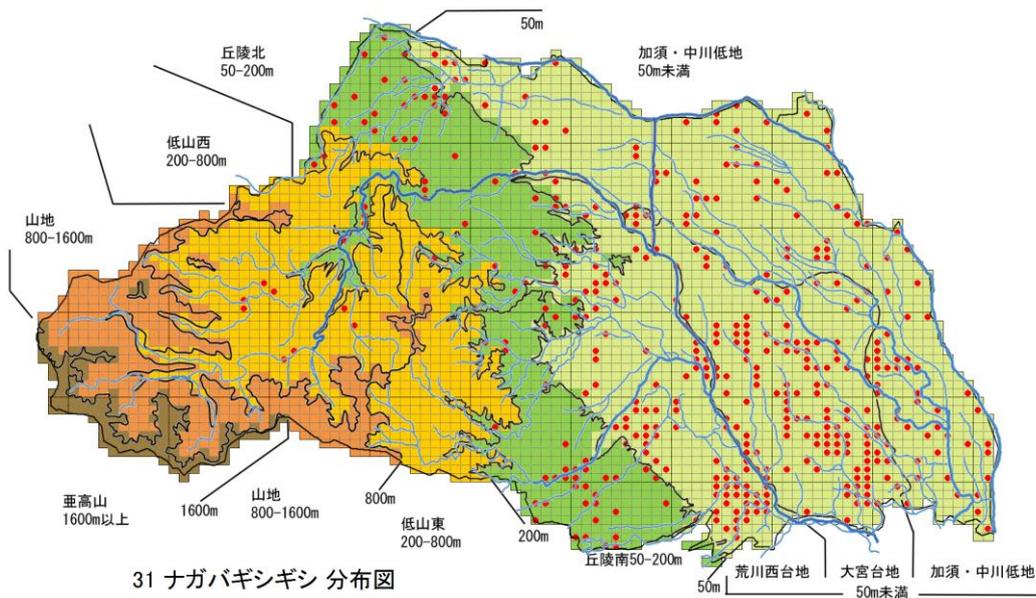
当該種の消長 外来種としてみるより鑑賞のためのユリという見方が強い。高速道路ののり面で、除草の作業員が本種だけを残して除草を終わらせている光景をよく目にする。ときに庭先で栽培している例も見受ける。花が大きくてきれいなことなど観賞価値があるため、保護される傾向があり今後も分布域を広げることになるだろう。2011年データにくらべ分布域は大きく拡大した。



31 ナガバギシギシ(タデ科) *Rumex crispus* L. その他の総合対策外来種



ナガバギシギシ分布図



31 ナガバギシギシ 分布図

分布状況

3年間の調査では、加須・中川低地、大宮台地、荒川西台地、丘陵北、丘陵南の各地から多くの報告があった。低山西には少し報告があるが低山東の報告はほとんどない。山地、亜高山の報告はない。

埼玉県植物誌

1998では三郷・吉川・松伏・庄和・浦和・川口・鳩山・小川・飯能・名栗・荒川・両神・吉田を除く全域分布である。県レッドデータ 2011の調査では二次メッシュ埼玉全54区画中36区画で分布が確認されている。今回の調査では全54区画中39区画から報告があった。現状維持あるいはやや分布拡大の傾向が認められる。

環境別報告件数 今回は652件の報告があった。最大は河川敷37.9%で、次いで水田・休耕田・畑31.6%、市街地24.4%となる。三者

ナガバギシギシ			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	38	5.8
河川敷	B	247	37.9
水田・休耕田・畑	C	206	31.6
市街地	D	159	24.4
合計		652	99.7

はほぼ横並びである。それに対して雑木林は非常に少ない。日照があれば環境にとらわれず生育範囲

を広げるとのことだろ。

種の概要 全体はエゾノギンギンに似るが、エゾノギンギンの茎は赤みを帯び、花被片のふちは鋸歯

縁または刺毛となる。本種ナガバギンギンの花被片は全縁で、中脈のこぶ状突起 3 個は不ぞろいである。また、ギンギンともよく似ている。ギンギンの花被片には波状の低鋸歯があり、中脈のこぶ状突起 3 個は同じ大きさである。ナガバギンギンは分布域が拡大しており、エゾノギンギンやギンギンはほとんど目立たない。

ナガバギンギン		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1		1					1	
2							0	
3							0	
4	1	7	1	3	1		13	
5		27	35	104	114	2	282	
6		14	19	77	154	39	303	
7	3	15	11	24	50	26	129	
8	4	7	1	4	10	10	36	
9	2	17		3	3	3	28	
10	7	72	6	10	11	2	108	
11	10	19	2	3	6	3	43	
12	6	6					12	
合計	33	185	75	228	349	85	955	

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

生活段階の月変化 5-7 月では生活段階の葉だけ・つぼみ・開花・結実・枯死のすべて

の段階がそろっている。つぼみと開花と結実が一見して区別しにくく、この点はイネ科植物に共通す

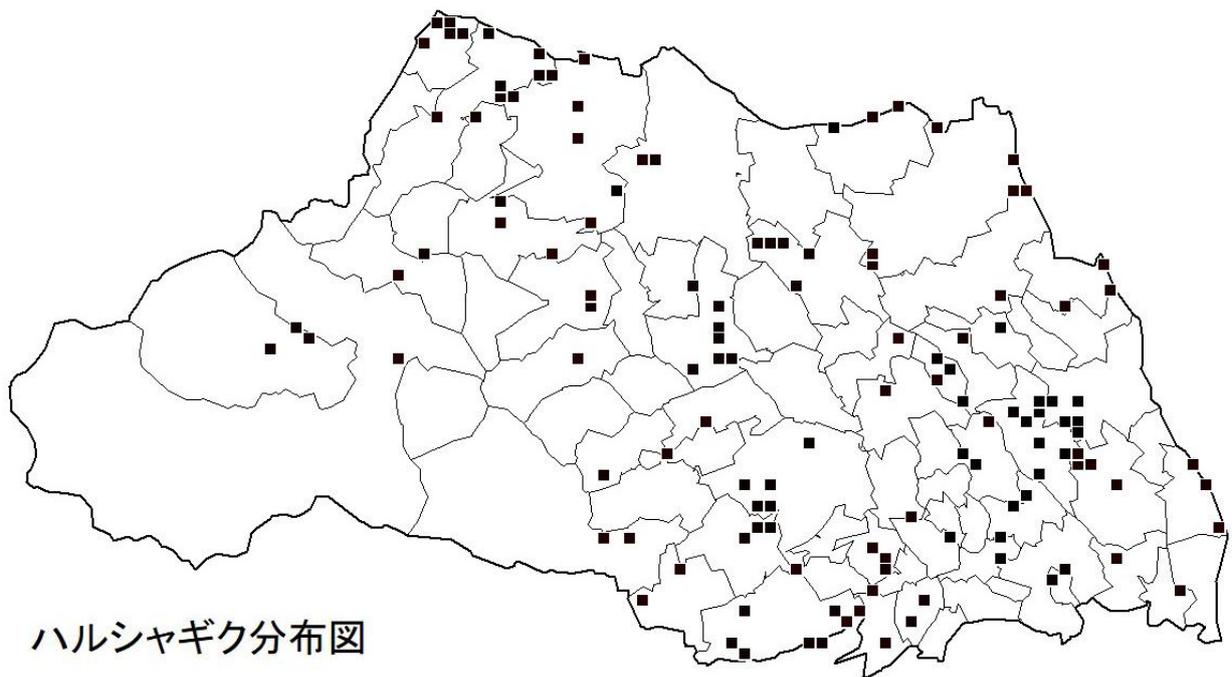
ナガバギンギン		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1					1								1
2													0
3													0
4		1	3	5									9
5	11	27	77	39	13	10			1	2	1		181
6	16	27	92	27	22	17			1	1	1	2	206
7	5	12	31	13	6	6			1	1			75
8	4	4	11	2					2	1	1		25
9	1	1	19	4									25
10	2	7	36	18	10	7				3	2	1	86
11	1	6	12	10	1	2				1			33
12		1	7			1				1	1		11
合計	40	86	288	118	53	43	0	0	5	10	6	3	652

る。やや季節感に乏しい植物でもある。開花の中心は 5 月から 6 月のころ。幼植物は 7 月から 12 月まで続く。次々と発芽し成長しこのまま越冬する。ナガバギンギンは多年草である。

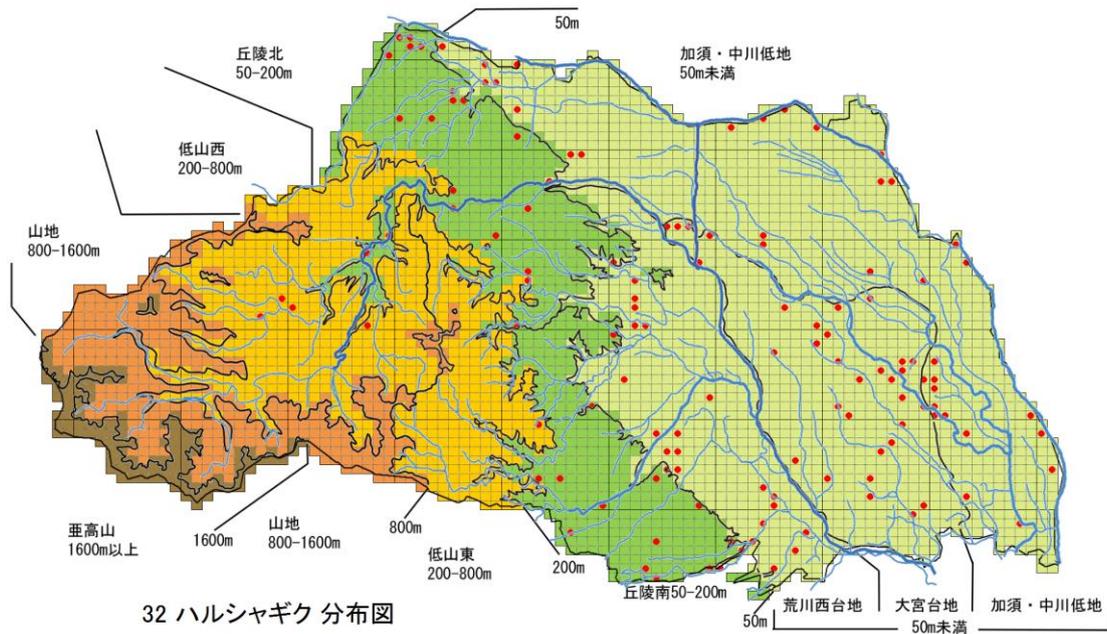
群落の大きさ・広がり 大きさの中心は 10-99 株である。どちらかというと単立するより 100 株以上の集団になる場合が多い。

当該種の消長 1891 年に東京で帰化が報じられ、現在では全国に広がって、道端や荒地に普通に見られる。繁殖力が強く、分布を広げている。本県では 1998 年には未確認市町村がいくつかあったが、今年度の調査でそれはほとんどなくなってしまった。





ハルシャギク分布図



32 ハルシャギク 分布図

分布状況

3年間の調査では垂高山、山地、低山にはほとんど分布しないが、低地・台地・丘陵にはごく普通に分布していることが分かった。その分布は河川に沿っている例が多い。

埼玉県植物誌 1998 では秩父域、県北部、県東部の北で確認されている。県レッドデータブック 2011 の調査では二次メッシュ埼玉全 54 区画中 28 区画で分布が確認されており、全区画の半分の確認となっている。今回の3年間調査では全 54 区画中 34 区画から報告があった。徐々に拡大している傾向が読み取れる。

環境別報告件数 報告件数は 143 件であった。最大は市街地 36.4%、次いで水田・休耕田・畑 30.1%、河川敷 28.7%とつづく。雑木林はごく少なくわずか 4.9%である。雑木林以外の

ハルシャギク			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	7	4.9
河川敷	B	41	28.7
水田・休耕田・畑	C	43	30.1
市街地	D	52	36.4
合計		143	100.1

ハルシャギク 生活段階の月変化(2016-2018年)							
月\生活段階	1	2	3	4	5	6	合計
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死	
1							0
2							0
3							0
4		1	1	1	1		4
5		3	2	10	1		16
6		1	20	69	14		104
7		2	8	34	10	2	56
8		1	1	14	7	1	24
9			1	4	1		6
10			1	3			4
11				1			1
12							0
合計	0	8	34	136	34	3	215

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

環境には、ほぼまんべんなく分布している。

種の概要 別名ジャノメソウ。日あたりを好む傾向がある。コスモスに似た花の中心部分は紫褐色、その周りは黄金色に縁どられ、蛇の目傘を思わせる。生態系の被害のほか、人体や経済・産業へ幅広く被害を与えているというが、その実態がはっきりしない。さらに調査を進める必要がある。

生活段階の月変化 成葉は、

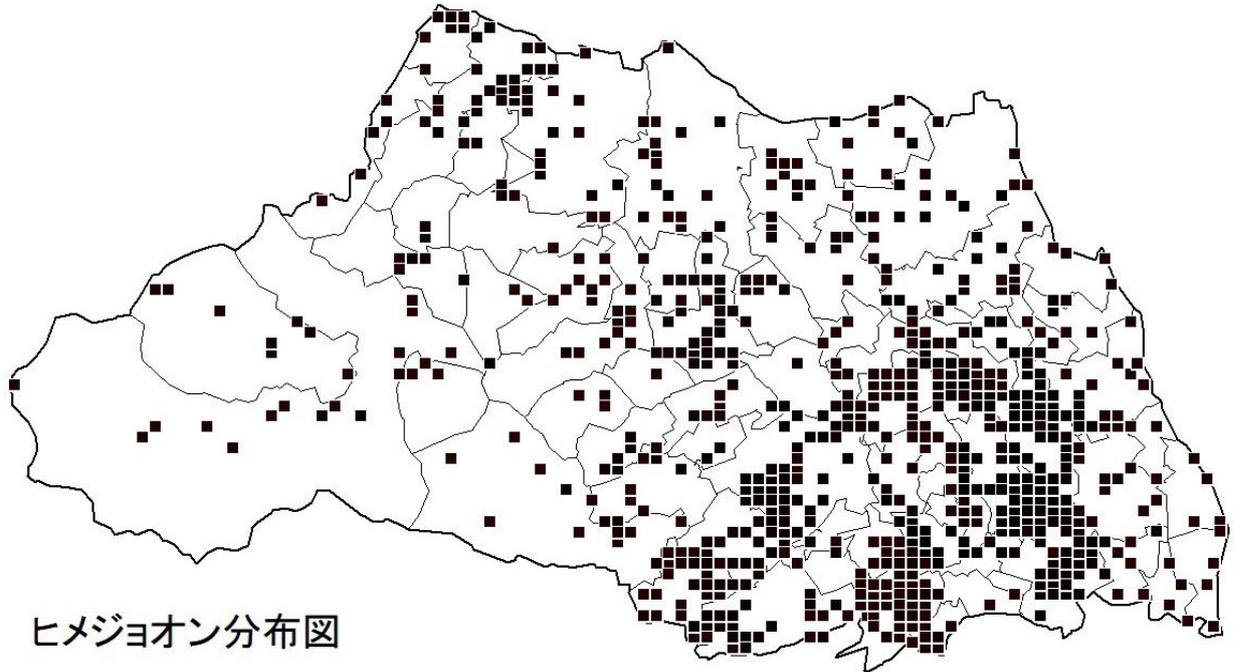
5-7月、つぼみも5-7月。開花は5-10月となる。開花期間は長く中心は6月となる。結実は7-8月となる。ハルシャギクの最盛期には6-8月となる。

ハルシャギク 群落の大きさ・広がり(2016-2018年)													
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	合計
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1													0
2													0
3													0
4			1	1									2
5	1	2	6	3	1								13
6	4	17	32	10	2	4					1	1	71
7	1	6	18	6	3						1		35
8	2	4	1	3	2					2			14
9	1	1	1						1				4
10	1	1		1									3
11											1		1
12													0
合計	10	31	59	24	8	4	0	0	1	2	3	1	143

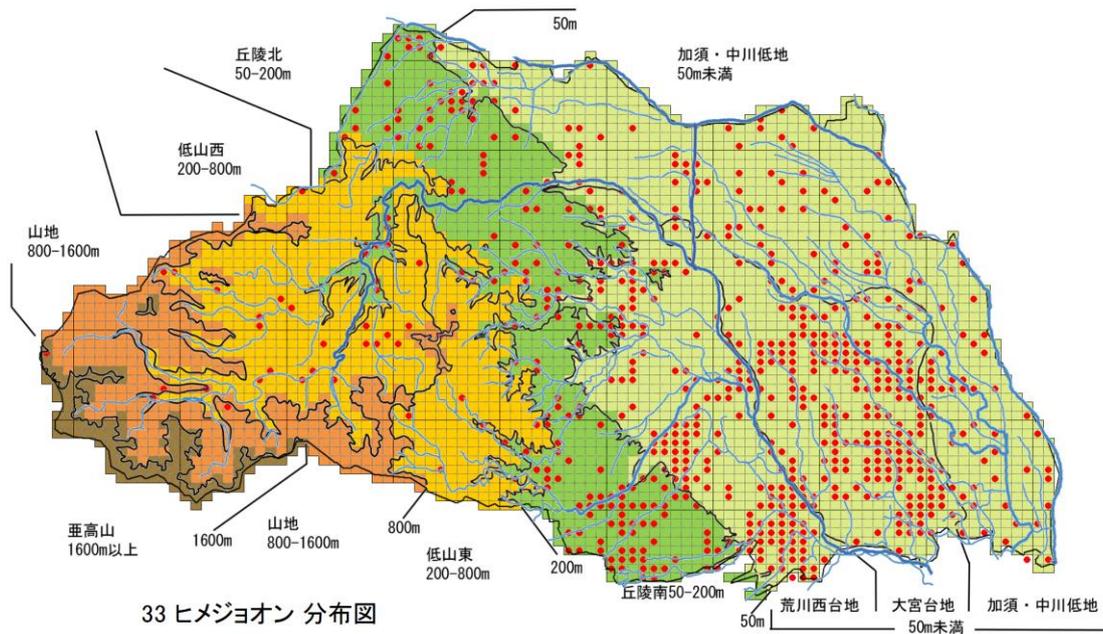
群落の大きさ・広がり 株数では10-99株が一般的な大きさとなる。6月が最も目立つ時期で、7月から8月にかけて急に目立たなくなってしまう。

当該種の消長 明治初期に渡来。古くから良く知られた園芸植物で、強健なため各地の空き地で野生化している。種子は自然にこぼれて発芽し、日当たりの良い庭や空き地などに毎年生える。しばしば大きな群落を作る。分布は1998年のころは全県に及んでいなかったが、2011年頃にはほぼ全県をカバーし、今回の調査は県全域分布を裏付ける結果となった。





ヒメジョオン分布図



33 ヒメジョオン 分布図

分布状況

3年間の調査で本種は県内ほぼ全域で確認された。

埼玉県植物誌 1998によれば吉川町、三郷市、江南町を除き県内全域に分布していた。今回の調査でそれらは埋められて

いる。県レッドデータブック 2011の調査では二次メッシュ埼玉全54区画中47区画で分布が確認されている。今回の調査でも全54区画中45区画から報告があった。報告のなかったところは未調査の場所である。

環境別報告件数 1179件の報告があった。報告件数は非常に多い。数値の大きい順に市街地 34.3%、水田・休耕田・畑 32.1%、河川敷 22.8の順となる。雑木林は少し低い値を示すが、およそ環境を選ばずどの環境にもまんべ

ヒメジョオン			
環境別報告件数	記号	件数	%
雑木林	A	126	10.7
河川敷	B	269	22.8
水田・休耕田・畑	C	379	32.1
市街地	D	404	34.3
合計		1179	99.9

もなく分布しているといつてよいだろう。雑木林の分布率が低いのは外来種一般に共通した傾向であるが、他の外来種に比べればヒメジョオンは高い数値を示している。

ヒメジョオン		生活段階の月変化(2016-2018年)						合計
月\生活段階	1	2	3	4	5	6		
	幼植物	葉だけ	つぼみ	開花	結実	枯死		
1							0	
2							0	
3	1						1	
4	1	2	6	8			17	
5	2	54	97	153	18	2	326	
6	5	31	95	368	67	3	569	
7	6	15	37	143	46	6	253	
8	2	3	8	52	23	3	91	
9	8	11	25	87	31	1	163	
10	20	19	30	119	49	4	241	
11	16	9	15	51	7		98	
12	12	6	4	11	2		35	
合計	73	150	317	992	243	19	1794	

種の概要 ハルジオンとよく似る。ヒメジョオンは茎に白い髄が詰まっており、根生葉は長い柄があり、葉身は円形に近く大きな鋸歯がある。花期には根生葉は消える。ヒメジョオンはハルジオンに遅れて咲きだす。生物多様性保全上重要な地域にも侵入定着して被害をもたらす可能性が高いといわれるが、本県ではまだ該当例を聞いていない。調査を続け、詳細なデータの集積に努めたい。

複数報告があれば合計値は環境別報告件数を上回る。

生活段階の月変化 幼植物、

成葉、つぼみ、開花は4-12月の間いつでも見られる。結実も5-12月を通して確認できる。きわめて季節感の乏しい植物と言える。それでも開花の中心は6月となる。10月以降はロゼットが目立つよう

ヒメジョオン		群落の大きさ・広がり(2016-2018年)											合計
月\大きさ	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	
a-fは株 g-lはm ²	1-3株	4-9株	10-99株	100-999株	1000-9999株	10000株以上	0.05m ² 未満	0.25m ² 未満	1m ² 未満	10m ² 未満	100m ² 未満	100m ² 以上	
1													0
2													0
3			1										1
4	5	1	3	1					1				11
5	10	26	116	61	9	3				2		1	228
6	10	45	170	106	24	28		1	1	2	4		391
7	5	16	59	39	6	12				7	1	3	148
8	4	12	22	14					1	2			55
9	14	23	54	8	1					1			101
10	22	33	62	18	8					5			148
11	15	13	35	5							1		69
12	3	11	10	2						1			27
合計	88	180	532	254	48	43	0	1	3	20	6	4	1179

になる。

群落の大きさ・広がり 10-99株の群落が多い。群落面積では10m²が普通の大きさである。

当該種の消長 江戸時代末(1865年ごろ)に観賞用植物として導入された。その後逸出し、明治初年には雑草化している。繁殖力が強く、刈り取っても残った根茎で再生するため分布を広げている。すでに在来種と共存定着しており増減については大きな変動はない。

